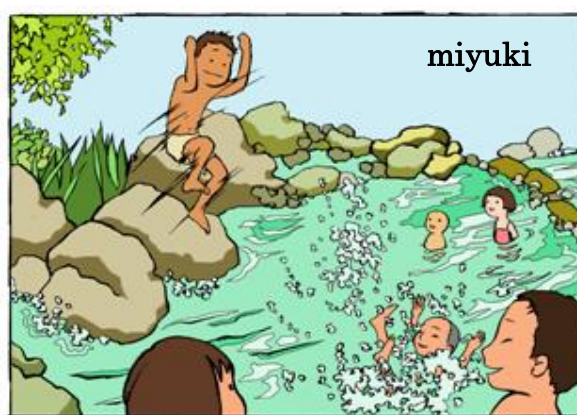


山内回想遺産



平成27年10月

山内エコクラブ

はじめに

「山内のどこが好きですか？」とうかがったところ、「人情やわ」「自然との暮らし」という答えが返ってきました。また「わからんけど離れたくないし、ここで死にたいわ」とも。山あり谷ありの人生80年を生きてきた古老たちの「知恵や心を何とかして残せないか、つなげられないか」と駆り立てられ始まった山内回想遺産づくり。

日本は、1960年代以降のエネルギー革命を機に機械化が進みました。わが山内も遅ればせながら影響され、山や川、獣と共存し、自然に根ざして生きてきた暮らしが地下資源に頼って生きる暮らしになってきました。「結い」や「肩身分け」「普請」といった村共同作業が影を薄め、個々人の家庭で処理できるようになり、近所に「気を使うこと」「おせっかいをされること」などのいわゆる「わずらわしい」ことはなくなって、個々人の権利やプライバシーが尊重されてきました。物質的な豊かさが急速に進みすぎたせいも、心の豊かさや地域のつながりの良さが少し置いてきぼりにされたことに、気が付き、「つながり作り」などと言いかけてきました。

こんな声もありました。「昔はな、近所で水や力をわけあった、もらい風呂っていうて、近所で順番に風呂の日を決めてみんなが入りに行く、風呂は入りに行くだけやなくて夜に会ったら百姓や山仕事の相談や報告をするんや、『これよかったからお前のところもしたらどうや』」

このような会話の積み重ねが今でいう地域ネットワークやソーシャルキャピタル(社会関係資本)の原形なのでしょう。

「手を合わせる」所作、山、井戸、川、牛、食べ物、野草、親、家族、友、万物に対する感謝、「生かしてくれてありがとう」このような気持ちが暮らしの中で当たり前になりました。昔を語る山内

の古老たちは、自分たちも自然の一部として人間が人間らしく生きるために自然と共存しながら、また人間相互の連帯感などの社会の基盤を作ってくれました。

1960年以前に私たちの生活に戻ることは不可能です。

でも、話を聞くことで、失われてしまった、また失われつつある村のルールや行いの中には、これからもずっと伝えていきたい大切な何があるかもしれません。

教えてください、生きてこられたかけがえのないふるさと山内の歴史や生き方を。そして、過去からのふるさとの歴史に積み重ねて「新しいふるさと」を作っていきましょう。

過ぎ去った日々の出来事や出会った人々の姿、人に助けられ助けたこと、山・川・生き物などの自然のうつろい、聞き覚えや見覚えのある歌や声・民具、舌鼓を打って味わった懐かしいおやつや料理などを思い浮かべ懐かしんでいただけただけの時間であったなら、そして「自分の人生も見直してみたら、えろう（山内の方言：そんなに）悪いもんやなかったわ」と思っていただけなら幸いです。

健康は、身体的・精神的・社会的な3側面が必要です。老人力をもって 地域に“最期の奉公”を果たしていただいた語り手の方々は、「社会的に健康であること」を立証されました。

決して楽しいことばかりではなかった記憶の箱〔壺〕を開け、語っていただいた方々に心より感謝します。

山内エコクラブ代表 竜王真紀

目次

はじめに	1
山内回想遺産づくりとは.....	4
主要メンバー.....	6
語り手	7
聞き手	7
回想の意義 介護予防の視点から	8
テーマごと要旨.....	9
①小学校時代の食、田んぼ.....	9
②戦争体験・戦争時代の暮らし	9
③小学校の学校生活	10
④子どもの頃のおやつ.....	11
⑤水文化	11
⑥昔いた川の魚 琵琶湖に注ぐ野洲川の源流.....	12
⑦農と食の暦.....	13
ちょっと詳しく・古老メモ.....	15
★山内の道・地名・橋・黒川城址.....	15
★昔の暮らし衣食住、冠婚葬祭	16
★戦時中の暮らし	19
★昔の子どもの遊び	22
★おやつ	23
★民具	23
寄稿 山内村回想遺産 年中行事と民間信仰	24
誇りある 古老たちの生きざま	27
次の世代に伝えたいこと・残したいこと	35
資料 新聞記事（中日新聞）	36
総評 山内回想遺産の取組みの位置づけを考える.....	37
資料 聞き書き 原文.....	41
山内にあった屋号と店.....	57
資料 山内エコクラブ活動より 子どもたちによる聞き取り	58
資料 山内エコクラブ活動より「やまえこ通信」抜粋	59
資料 平成 23 年度 山内自治振興会 地域福祉部 名人発掘事業.....	62
資料 山内の太鼓祭り〔黒川・黒滝・山女原〕	66
山内の方言と言ひ回し〔甲賀郡史一部参照+アルファ〕	74
資料 山内小学校ができるまで（山内小学校 同窓会誌“やまうち”より引用）	75
資料 活動写真.....	78
資料 航空写真 昭和 23 年のふるさと黒川周辺	79
エコクラブ活動から山内ふるさと絵図作り展開へ.....	80
おわりに	81

山内回想遺産づくりとは

[山内回想遺産グループについて]

方針： 高齢化率 35%を超える地域において、そこ住む高齢者たちが元気であることが重要である。それには、地域における高齢者の「その人らしさ」を重視した介護予防、認知症予防が必要である。

高齢者は、生きてきた生活史はかけがえのない遺産であり、その記憶を回想することは、高齢者の脳の活性化だけでなく、精神的な安定、ウェルビーイングにつながる。また、その知恵を活かすことで、高齢者の社会参加、世代間交流等への町づくりへとつなぐことができる。

- 目的：
- ★自分の人生を振り返り、気持ちが楽になって、残りの人生を前向きに生きようとする
 - ★過去の辛い経験があったとしても、現在の生きている力になっていることを自分で認める
 - ★思い出の話は、脳にいい刺激を与える
 - ★ふるさと山内を大切にすること
 - ★かけがえのない叡智を伝えていく

約束事： ・みんなが語る

- ・お互いの守秘義務
- ・人の話を否定しない
- ・言いたくないことを言う必要はない
- ・他の人の話を聞いて、思いをかけめぐらせるだけでもいい

期間：平成 25 年 12 月～平成 26 年 3 月 延長はかまわない

会の発足：山内自治振興会 平成 23 年度 地域福祉部 名人発掘事業で発掘された名人を中心として、自主グループ「山内回想遺産グループ」が発足

企画・運営・事務局：山内エコクラブ

協力：土山歴史民俗資料館学芸員 山内自治振興会

成果物：「山内回想遺産」の冊子にする。

日 程

日 時	テーマ
平成 25 年 1 2 月 6 日 (金)	山内の道、地名、橋、 黒川城跡
平成 25 年 1 2 月 2 0 日 (金)	小学校時代の遊び、お手伝い
平成 25 年 1 2 月 2 8 日 (土)	戦争体験・戦争の頃のくらし
平成 26 年 1 月 1 0 日 (金)	小学校時代の学校生活
平成 26 年 1 月 1 9 日 (日)	子どもの頃のおやつ、 なつかしのおやつを食べながら
平成 26 年 2 月 5 日 (木)	民具とともに 山内小学校 3 年生との交流

平成 26 年 4 月 13 日 山内の歴史の振り返り

平成 26 年 7 月 5 日 山の暮らし

平成 26 年 8 月 31 日 田んぼの話

平成 26 年 10 月 26 日

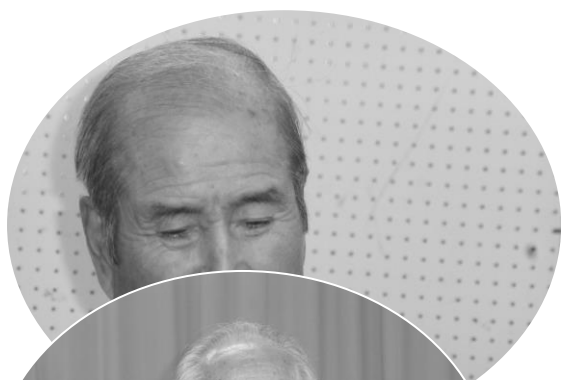
自然・生きものとの暮らし

平成 27 年 5 月～

ふるさと山内絵図作り 企画



主要メンバー



語り手

名 前	生まれ年月	お住まい
野尻 清 さん	昭和 4 年 12 月	黒川市場
澤田 久雄 さん	昭和 2 年 12 月	川西
黒川 元一 さん	昭和 5 年 6 月	笹路
北林 照雄 さん	昭和 6 年 3 月	山女原
杉本 庄治 さん	昭和 7 年 3 月	黒滝
安村 武一 さん	昭和 8 年 5 月	黒滝
小林 善一郎 さん	昭和 10 年 8 月	山中
落合 道夫 さん	昭和 11 年 3 月	川西

聞き手

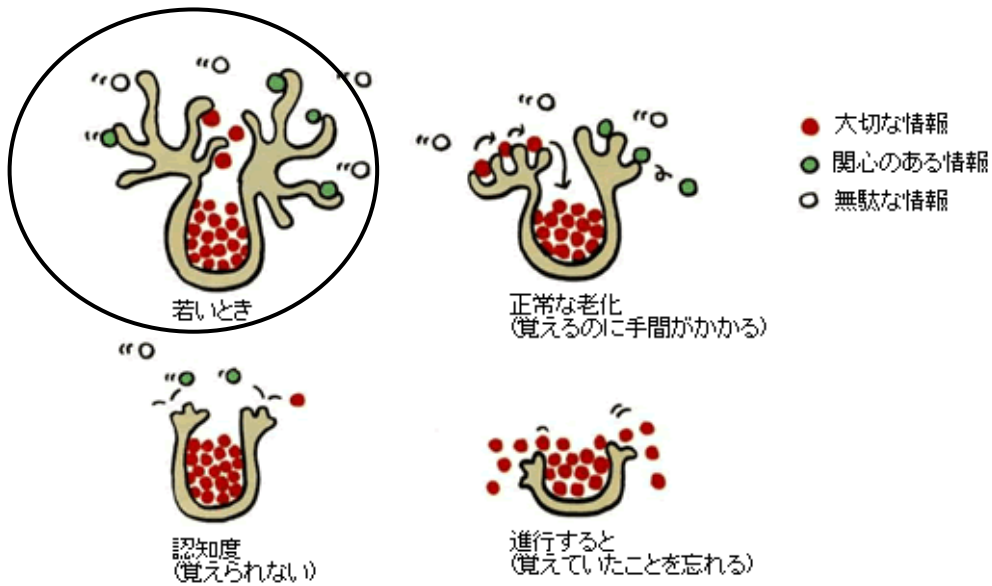
名 前	生まれ年	お住まい
小林庄一郎 さん	昭和 14 年 5 月	山中
中森武 さん	昭和 15 年 11 月	猪鼻

ゲスト

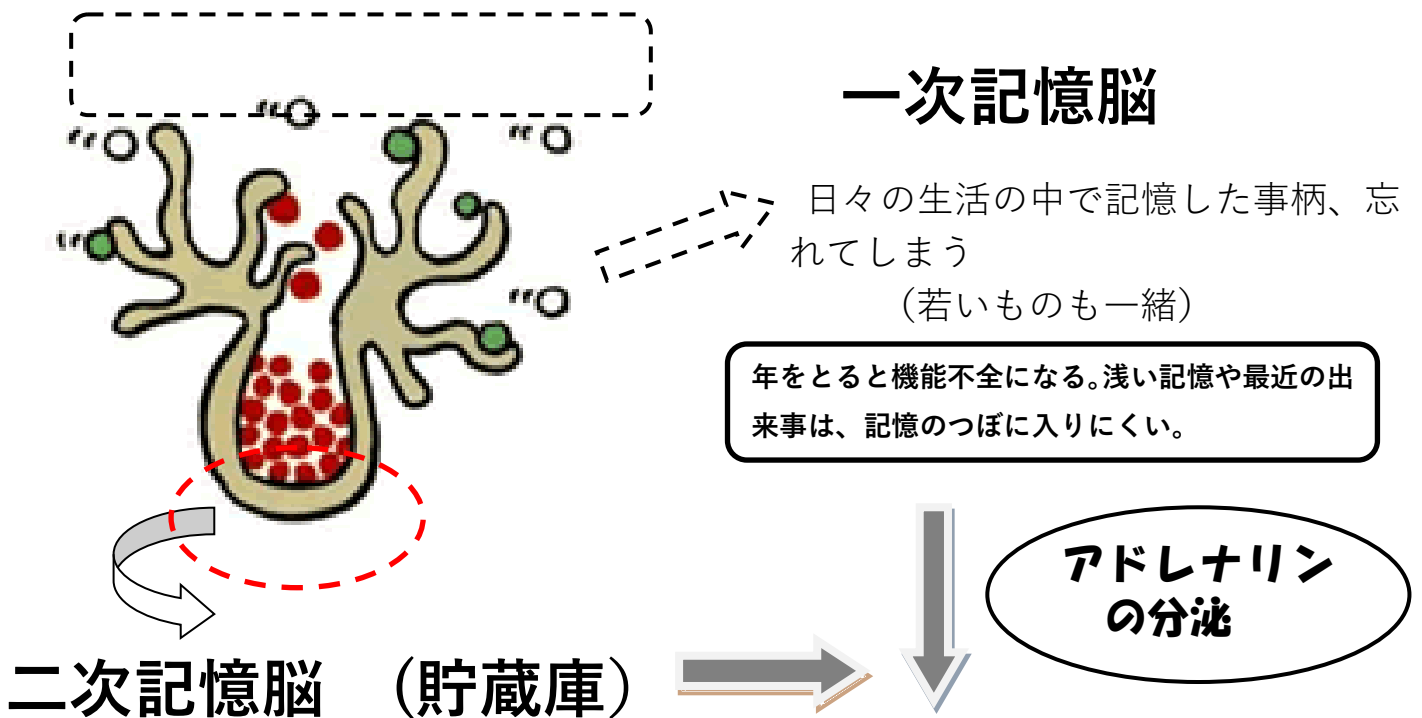
戸田悌造さん	〔インタビュー〕	山中
岡田正男さん	〔インタビュー〕	上の平
谷口久一さん	〔インタビュー〕	中の組
鍋家渡支雄さん	〔寄稿〕	上の平

回想の意義 介護予防の視点から

昔語りはどうして、高齢者を元気にさせるのか??



貯蔵庫からの記憶を出すことは快感である



喜び・楽しさ・苦しさ・感動・心を動かした内容は記憶のつぼに貯蔵されており、

出されるのを待っている。出番が来たら、眠っていた記憶を呼び覚まさせることにより、人は元気になれる

テーマごと要旨

①小学校時代の食、田んぼ

家には、牛がいた。牛は、農耕の道具であったので大切にしてきた。食べものは家に豚や鶏を飼って育てて食べた。山の兎も追っかけた。おくどさんでのご飯や煮焚は女の仕事、芝刈りは男の仕事。水は川や井戸、生水。山の木の実は、おやつであった。命を作る食は自然からの恵みであり、みんなの心には自然のモノに対して感謝があった。

農作業には駆り出された。肥持ちも子どもが行った。田植え、稲刈り全てですのために、稲刈りは11月くらいになった。

村で作業を助け合う“かたみわけ”“結い”は、牛を持っている家に牛を借りたら、お金ではなく、手間で返すことであった。茅葺を皆で助け合う事での“茅講”が今も続いているところがある。

②戦争体験・戦争時代の暮らし

戦地に行ったものは、現在は少ないが、予科練に入っていたものはある。

戦地に送りだすのに、猪鼻まで見送りに行って華やかにラッパを鳴らしてもらったのは、始めの方だけで、徐々になくなった。

皆、志願して行った。一次試験、二次試験があったが、優秀なものしか行けない。

「日本は負けるわけがない」と信じていた。「国のために死ぬことは名誉なこと」で「負ける」なんて言ったら、捕かまる潮流。終戦近くになったらたくさんの釣鐘が供出された。山内に空襲はなかったが、警報はあり、防空頭巾をかぶった。運動場は芋畑、都会からの疎開してきた子ども達は、お寺で受け入れられていた。

③小学校の学校生活

男子の遊びは、めんこ、竹馬、夏は川遊び、冬はそり遊び。

上級生が下級生を指揮、遊びは子ども達が工夫をして作った。子どもたちだけで高畑山等の山登りもしたが、親たちは「気をつけて」と言うのみで、子ども達を信頼して任せてくれた。(細かいことを言わない親たちであった)

女の子は、あやとり、お手玉。

小学校には昇降口に大きな鐘があり、それがチャイム代わりであった。

教科書はお下がり、鞆や草履は家で作ってもらったもの。

学校の先生は、絶対的な存在であり、流行歌を歌って叱られたり、机を修理しているだけで叱られるなど不合理なこともあった。

試験もあった。成績は、優良可。落第は、少し前はあったが、家の用事をしなければならなくて学校に行けてなかったこともあった。

農繁期は、学校が休みになったころもあった。(昭和5年)

修学旅行は伊勢であったが、昭和6年生まれ以降は、戦争がひどくなってきたので行っていない。

④子どもの頃のおやつ

あられ作りは、大変であった。あられは良いもち米で、正月には、2升1うすを、10うすくらい作っていた。

団子は悪い米を使った。ユルごを引いて、蓬菜に流して黒砂糖を削って、正月は、3升くらいしていた。

お菓子は黒砂糖、水をくんで、白い豆を炒って食べさせてもらったことを覚えている。干し柿も食べた、これはおばあさんの仕事で、手を真っ黒にしていた。

はったいこ は美味しかった。はったいこに渋柿・・

いなごに熱湯をかけて、炒ると足が落ちて、だしが出る。

ゲジゲジを食べた(春から夏)、なすびやキュウリを生で食べた。芋・栗・石をぶつけた採ったすもも。食べられるものなら、何でも食べた。「とにかくおなかがすいていた」肥満児なんていなかった。いりこはもち米が本当、いりこなはもち米が玄米を炒って、粉にすること

⑤水文化

○黒川・黒滝・山女原の花笠太鼓祭り

踊りの起源は、この地区が農林山村であることから、農作業の安全や豊作の祈願が由来になっているらしい。特に、水稻農業においては水がなければ成り立たないことから、旱魃の際の雨乞い踊りが始まりであるといわれている。詳細は、別紙参照〔P48～〕

○黒滝の井水：井戸が少なかった黒滝では湧水を生活に使っていた。3つの生水には、上

から飲み水、野菜の洗い水、汚れものの洗濯水と分けて村の人たちが使っていたそう、上水道が入ってから使わなくなった。

○井戸神：井戸の水がわき水で飲み水になった。冬は暖かく夏は冷たい感じがした。井戸の水が枯れることはなかったが、枯れないように、恵みの水としての感謝をしたので、お正月には井戸の神さんとしてお鏡のお供えをした。

○龍王神

龍神さんと言えば、全国いたるところにあります、雨を呼ぶ神様で、タカオカノカミ様が、山の上に住む龍神様、谷底に住む龍神様がクラオカミの神様です。この二体の神様が古い昔から、山内の中の組、千谷に住みつかれたそうです。日照りが続くと、龍神様に雨乞いのお祈りを村人がしたようですが、一時お祈りが途絶えたこともあったようですが、「竜王」という氏をいただいた関係から、今も毎月1日と15日は水とお酒を備えて祀られています。

⑥昔いた川の魚 琵琶湖に注ぐ野洲川の源流

スナヤツメ、ウナギ、コイ、フナ、アユ、オイカワ、モロコ、カワムツ、ハエ、ナマズ、ドジョウ
メダカ、ヨシノボリ、ドンコ、アカザ、アマゴ、サンショウゴ、シジミ、タニシ、カニ、ザリガニ

○川に魚が減ったのは・・・

頭首工がところどころにできたから

農薬を一時的に使った

河川に護岸ができて魚が住めなくなった

野鳥が増えた

ゴルフ場の影響もあるやろうな

⑦農と食の暦

	田んぼ	畑	山
2月	畔や水路の水漏れの修理	じゃがいも植え	
3月	肥料は、豆かす、湿地には蓮華、苧草を踏みこむ 畦こしらえ、畦の皮むき、畔塗り、土持ち		杉・ヒノキ植林
4月	苗代づくり	夏野菜作り	
5月	田打ち、田植えの準備		大鎌で下刈り、
6月	田植え10日間ほど、畦には大豆、小豆 田植えを終えたころ、野上がり、さなほりといった 行事がある。家々でちまきを作り休日を楽しんだ。	じゃがいも収穫 茶刈り、茶の加工	木の手入れ
7月	田の草刈、男は除草機押し、女は田を這うようにし		
8月	て手で草取り	秋まき野菜	
9月	田の水管理、水争いも多少ある	大根など保存の 野菜の種まき	
10月	稲刈り〔農林6号 当時の早稲〕 畦豆の収穫		松茸、しめじと り
11月	稲の乾燥、モミすり、出荷	米が終わると	炭焼きに入る

	ハサで天日干しだったので子どももこも巻きの手 伝い 米つきの動力は、村に1, 2か所ある水車	麦、菜種を巻く 二毛作	(黒滝)
12月	藁しまい、縄ない、俵編み、むしろ織が主な仕事。		萱刈り
1月	冬の天気が悪い時には、藁仕事、こも、俵、炭俵、 藤ふご、藁ふご、草履など百姓が使う道具を作った		屋根講で葛屋 を交互に補修

○荒おこし 動力は牛と人力、牛に唐犁をひかせて田をおこす。人は鍬、熊手で一株一株起こして大変な作業であった。土を砕くために、牛に馬鋤をひかせる、回転するものもあった。人は手で土を砕いた。

○苗代 子どもたちが学校の行事として、田に入って1センチくらいの竹の棒を持って、早苗に上を静かになでて、二化めい虫の卵や蛾を探して、部落内の苗代を一枚一枚とって歩いた。

○畔塗り 畦の皮をむき、「モグラやネズミ」の穴をたたいて穴を塞いで田土を塗りあげた。

○田植え 当時は人の手で植えられた 「一人一反植えて一人前」と言われた。

野あがりという神事があり、できるだけ早く〔春の〕農をあげるために、親戚と“かたみ”“結い”をして人勢をそろえて競い合って植えた。苗植えは2本の縄を6尺の幅に張り、8本から9本植えた。苗採りは早朝が多かった。女性が“かたみ”として駆り出された。

○肥料 大豆かす の乾燥したものと、藁や草まゆを積み重ねて堆肥にして田に鋤き込んだ。他に田に蓮華をまき刈り取って肥にとった。

○収穫 1反当たり7俵から8俵収穫していた。もち米は自家米が多かった。精米は水車でいう事が多かった。水田には湿田と乾田があり、湿田には年中水があるので、秋の稲刈りにも“田船”を使い、大変な作業であった。

○藁の保存 わらを104束を使い、三角の形に束ねて「すすきぼうし」を作り、田の中で乾燥すると、木杭と竹で作った「ハサ」を立てて、藁をかけて、乾燥させた。縄の代わりに藤のツルを利用した。

ちょっと詳しく・古老メモ

★山内の道・地名・橋・黒川城址

山内は、9つの集落で成りたっている。山内村の地名は、山中村がもとで、なかなか決まらず、他の8つの集落の強い申し出の末に協議のうえ、山内村が誕生した。

六友〔りくゆう〕とは、大字黒川・黒滝・山女原（あけびはら）・笹路（そそろ）・山中・猪鼻（いはな）を言う。

大字黒川とは、上の平（かみのひら）・中の組（なかのくみ）・市場（いちば）・川西（かわにし）の集落を言う

境界は、もともと河（川）、山の尾根、谷で定められていた。時代は道を必要とすることで、街道が生まれた。その後に道が境に使われるようになったもの、地名もその後から誕生、由来も残る。道・峠・橋の名前はその地にあった名がつけられたもの。

山内の道に「こわめし坂の場所有る」と聞く。大峠（東海道）から猪鼻の村に下り、小峠こわめし坂を上り、山中村の西野口に至る。山中の西口から、黒川・鮎河に至るには、山中川を渡り、灰山の裾の峠を登り、小屋が谷を下り野尻に至り、笹路川、田村川の合流地点付近の宮の下の坂橋を渡り角へ、長松寺の下、沢田、坊垣外を通り、中の組へ中村、坂畑、に至り、戸別あたりの谷を登り、鮎河の千狩りへ続く道が利用されていた。この道は、川の西を通ることから、橋を減らすことができた話。

地名には、公図や登記簿などにつかう地名とその土地、所だけの俗名として便利上使う地名も残っている。

山内の西の入り口の山には、「灰山下の川には石炭淵」というところがある。村の中にはこうした俗名がたくさんあるのである。

★昔のくらし衣食住、冠婚葬祭

○衣について

着物は紺色が多く、男性は、つつぽとパッチで野良仕事や山仕事に出る。女性はかすりのひっぱりモンペ姿で仕事をする。布は大切に使われていて、破けたところを「ツギ」をして直して使った。「ツギ」は女性の仕事で、雨の日や夜なべをして行った。

衣類は、兄弟・親戚から小さくなった衣服を「おふる（古）」と言って、着継がれていくことで、モノを大切にしていた。当時は針仕事をする女性も多かった。洗濯や洗いものは川や水路の水を使

っていた。

○食について

食には水が大切で井戸水、湧水を飲み水や煮炊きに使った。

主食は米、大麦で米を現金に換えるために、麦ごはんにして、節約して汁と煮物だった。

調味料の味噌、しょうゆは畑や田んぼの畦に大豆をつくり、自家製の味噌やしょうゆを作っていた。

ただし、塩は扱っている専属の店で購入していた。

どこの家にも味噌部屋があった。

蛋白源は、川にいる泥鰌（ドロマス）、田螺（タニシ）、川にいる小魚をとっていた。海の魚は遠く

伊勢（三重の白塚）から、魚屋が肩に担ぎ、自転車の後ろに乗せて商いに来るのを待った。

主に保存食を買った。特に「じゃこ」は、小魚の乾燥したもので、お汁などに使われていた。

牛肉はぜいたく品で入らず、豚・うさぎ・鶏の肉を使う。それもお正月やおめでたい時に使われていた。鶏は肉の他に卵を産ませるためにどこの家にもだいたい飼われていた。

野菜は、その時期に畑で収穫できる野菜を自作してお互い分けあって、新鮮なものを食べていた。

たくさん野菜をつくり、漬物や乾燥させて、保存食にして野菜のない時期の蓄えとした。

つねに自然の恵みに感謝していた。

○住について

葛屋の家が多く、瓦の家は一集落に4、5、軒だった。

葛屋は古くなったら、屋菜のふき替えが大変で、親戚や村人が総出の作業であった。

「かや講」というのは、近所で何軒かが年ごとに回りながら、かやぶき屋根をふき替える仲間のこと。

○生活について

水：井戸水～上水道

燃料：柴、割り木～電気、ガス、灯油

柴は“つし”といって、屋根裏に1年中使う分を冬中につくり確保しておいた

昔の主な仕事

百姓：田畑の野良仕事、米、麦、豆、野菜などを作る

山師：山の仕事、植林、下草刈り、伐採、木出し（運搬）、炭焼き

養蚕：蚕をかって「繭」をとる

職業：職人大工、瓦屋、屋根屋、左官屋、指物屋、鍛冶屋、博労、

主な産物：材木、炭、茶、米等の穀物（現金にかえたもの）

○冠婚葬祭について

婚礼も葬儀も家で行われた。昔は土葬、土葬は村の人が埋葬に携わった。村の人は、埋葬の準備ができたところで、お寺の鐘をつき、埋葬の始めを知らせた。三昧（さんまい）で、葬儀がすみだい、村の人が埋葬して、夕刻に村念仏というお参りが自宅で行われた。

結婚までに仲人を立てて結納を交わした。式は家で行う家が多かった。

昔は「嫁をもうたる」と言うたが、これは娘の親側が食い口を減らすために、早く嫁に出したか

った。娘の親が「もうたってくれ」と頼むこともあった。

嫁いびりはあったと聞く、早くから雨戸をあける、檜葉をバシバシ音を立てて、燃やす（檜柴を嫁お越しという）嫁は辛抱強かった。

★戦時中の暮らし

○山内の戦死者の数：支那事変から大東亜戦争までに140人

○遺族の方の生活

戦死者の中には、既婚者と未婚者がある。既婚者の家庭では、男手を失い年寄りと女手で春から夏までの野良仕事に、その間村の人や親せきの方のお世話で、田うち、田植え、稲の草刈を手伝ってもらっていた。まだ残った仕事は古くからあった。「結い」という決まりのなか、人手間をお互いに取り交わし行き来して助け合い仕事を始めた。

冬場は燃料となる柴作り、割り木出し、夏場は山に杉檜の植林、下草刈りと現金収入にして家計を立てた。留守家族や男手を失った家庭の生活は大変だった。

○戦争の経験

今回の回想遺産のメンバーの中、昭和20年4月～8月までに3名の人が志願兵として、出征するが、8月15日終戦となる。



○招集兵の選ばれ方

国より村に連絡があり、家族に知らされた。試験及び身体検査で甲種乙種に分けられ、甲種の人を選ばれ召集令状（赤紙）の通知を受け、出征していった。

受けた教育は、軍事教育で国のためには命までもと洗脳された教育で、同じ学校の生徒の味方女学校学生たちが作ってくれた千人針ら始められた。

○職業軍人

歴史に残る戦争、支那事変やインパール作戦に参加した部隊長、海軍大尉、少佐の位の人がいたと聞く。

○戦中の女性

軍需工場の女工として、山内からも亀山、四日市、

八日市、彦根、と軍事用品を作る作業に従事した。残された婦人は、国防婦人会として本土決戦に備え、学校の講堂や運動場で竹槍の訓練や防空演習など消火に対する講習など戦う備えをしていた。

○戦中の子ども

毎朝学校に行く前に、国旗を先頭にラッパの合図に合わせて、2列縦隊に並び大宮神社へ国の勝利祈願を参拝してから子どもも頑張った。

○子どもの頃の記憶

村から出征する人があれば、役場からお宮さんの参拝を終えて、東海道の猪鼻峠まで日の丸の旗、太鼓で見送る時も子どもも一緒であった。学校では、食料増産にと花壇や運動場までが畑になり、主に甘藷、馬鈴薯を植えた。

戦争も本土に及ぶころ、山内でも空襲に備えて、学校近くの山へ避難する。警報を合図に校庭に出て、みんなが揃って向山の妍白峠へ駆け上がった。

冬の寒い中、大宮神社の神主様は冷たい宮の下の川に降り、白装束で水に入り、寒行に入られ、多くの兵隊さんの武運を祈り、国土安泰を祈願される姿は、子どもながらに心を打たれた、尊い人であった。

今も、宮の森には、戦死者をまつる英霊殿が建っている。この英霊殿は、戦中両陛下が安置されていた奉安殿を払い下げて移築した建物である。

○疎開

本土空襲に備えて町から多くの人が疎開、知人を頼り空き家や納屋を借りて女・子供たちが引越して住んだ。終戦後も長く住んでいた人もいる。

町の子どもは子どもたちだけで、学童集団疎開は一学級単位で疎開していた。山内では寺に住まいして、山内の学校に行っていた。食べ物等は村の人の差し入れがあったと聞く。親を離れて子どもたちもつらいことであつたらう。これも戦争に勝つための教えの一つであつた。

○金物の強制供出

昭和17年5月9日に強制供出令が発令される。村の各寺の鐘も川西の大日堂に集められて、赤いたすきを掛けられて、村人に送られて強制供出された。

★昔の子どもの遊び

(男子・女子の遊びは違ったが、一緒に遊ぶこともあった。村中が遊び場だった)

○工作遊び

めんこ、紙飛行機、そり作り、そり滑り、ハンカチ落とし、笹舟流し、紙鉄砲、くす玉鉄砲
杉の実鉄砲、笹舟、竹トンボ、凧揚げ

○仲間と交わる

缶けり、かくれんぼ、鬼ごっこ、縄遊び、竹馬、影踏み、ビー玉、けんぱ

○競争し合う遊び

独楽回し、おこびし、輪回し、釘さし、水きり石投げ、雪合戦、毬つき、胴馬

陣取り、Sけん、ドッチボール、野球、おしくらまんじゅう

・竹を10センチくらいに切って、1センチに割る。薄く削り、皮と身に10本作り、その竹のへぎを手に乗せはね上げて、手の甲で受け皮と身を手から少しずつ落とす。皮のほうの多さで競った遊びがあった。

○屋内遊び

あやとり、かるた、トランプ、将棋、すごろく、こっくりさん、おはじき、お手玉

○山・川・野原遊び

木の実とり、昆虫とり、魚とり、山登り、

川遊び：水泳場は各分団（字）ごとに川を止めて、自然の淵（しちが淵、宮下の落合）等で遊んだ。

○いたずら

女の子を泣かせる、若い女の先生を泣かせる、すずき棒を倒す、

はさの藁をぬく、蓮華田を踏み荒らす、柿やいちごを盗む



★おやつ

子どもの時に食べたものは、外でとったもの、山いちご、

黄いちご、いたどり、おけすい、蜂の幼虫、生のきゅうり、なすび等遊びながら寒い時期にはあられ

腹が減った。

家のおやつは、田舎あられ、かきもち、だんご、ながし焼き、はったいこ、

芋ダンゴ、白豆、黒豆、ソラマメの煎ったもの。干し芋

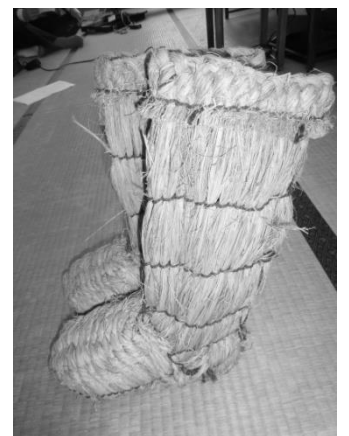
★民具

○わらくつ：防寒長くつ 藁で編んだブーツ

○枕：木の台に布に綿をいれたもの

○胴具：剣道の時に胴体につけたもの

○鐘：学校で使われていた。授業の始まりと終わりを知らせるもの



いつも小遣いさん（用務員さん）が時間が来ると鳴らしていた。

○バリカン：散髪屋さんが使っていた。丸刈り用のはさみ

○竿秤：物の重さをはかるもの

○計算機：手回しの計算機で特に掛け算、割り残に便利で今の電卓の前にできたもの

○ランプ：アルコールランプで灯りをとる。下に油を入れる、上にホヤと言うガラスでできた変形した筒状の物を乗せて、灯りを風から守った

○ねっけ：印籠や煙草入れ、財布などの根元につけた。いまでいうストラップやキーホルダー

○映写機：映画を写す道具、学校でよく使われた

寄稿 山内村回想遺産 年中行事と民間信仰

鍋家渡支雄さん

昔は山内の各地区には多くの年中行事や民間信仰などがありましたが、多くが戦後の生活改善や生活様式の変化で、勤められなくなり、忘れられたようです。

現代かろうじて残っているものや昭和 30 年代に忘れられたものを、ここに回想しました。

1 月、2 月は農閑期で、行事の多い月でした。正月の門松は、冬青（山内ではふくらそう）でした。

7 日には、各集落で山の神が勤められまして、祭神はコノヤサクヒメで日本の多くの山々で祀られています。

この神はサクラの語源ともいわれ、農業の神、サの神の語源かもしれません。この神は、一月に一人一年で 12 人の子どもを産んだと伝えられていて、行事では 12 数字を大切にします。黒滝地区の昔の行事のやり方は原型ではないかと思われます。

黒川には、9 日山の神が勤められていましたが、これは寺山の神と言われ「おこない」の変化し

たものと思われます。

10日過ぎには、各地で年初めの祈祷が行われます。又山中地区では「おこない」行事が勤められ勸請縄が張られます。この行事は、滋賀の多くの地区で勤められ湖北では「宮おこない」、甲賀では「寺おこない」が多いようです。土山では、山中地区と大河原地区で勤められていますが、いずれも「宮おこない」です。山中地区の「おこない」は、元は熊野神社の神宮寺天台宗神応寺の行事のようで、明治の廃仏毀釈後山中集落の区民が勤めているようです。

20日ごろには、黒滝や上の平で「月待」の行事が勤められ、この行事は「講」で宿が決められ宿で23夜の月を拝んだそうです。

2月には、黒滝の「餅講」各地の種もみを浸ける種池（たないけ）の掃除をする「池講」「萱講」多くの講の行事が勤められたようです。

講は調べてみると、大昔は仏教行事でしたが、山内では「観音講」「伊勢講」「愛宕講」「津島講」「明神講」「秋葉講」「阿弥陀講」「多賀講」「田村講」「行者講」ら多く勤められ、代参も勤められていたようです。

「池講」や「萱講」は“結”の互いに力を貸し合うことの延長で、大切に勤められていたようです。変わった講では、黒滝の「餅講」「おおめし講」山女原の「そば講」などです。またお金を融通し合う「頼母子講」や「無尽講」もあったようです。多くの集落で、初午や庚申の行事も勤められていました。

3月に入ると山内も忙しくなり、行事も少なくなります。

上の平の薬師堂の祈祷で、「狼札」が区民に配られます。集落の入り口に祈祷札を取りつけます。これは、山中の「おこない」行事と同じで、「道きり」の行事で村に悪いものが入らないよう願う

行事です。昔は、各集落でも勤められていたと思いますが、残っていないです。

4月には村祭りが農繁期の初めにあります。黒滝は7月、笹路は10月にお祭がありました。

6月には、田植えも済み、「サのぼり」の行事が勤められ、村人は農上がり祭りで日待ち講が勤められました。

7月には、「浅間さん」の行事が各集落で勤められましたが、今日では上の平、市場、笹路の三集落で勤められており簡素化されているようです。この行事のメイン禊とお山での「六根清浄」「籠もり」は行われていません。

8月は、「虫追い」の行事は、黒滝地区が戦後間もない時まで勤められていましたが、今は忘れられています。黒川の子どもたちが行事にしていた7日の七夕焼は虫追い行事と七夕祭りが合体して伝えられたのではないかと私は考えています。また8月は盆月で「7日盆」「墓参り」「洗い盆」「蛾鬼棚」「施蛾鬼」「地藏盆」多くの仏教行事が勤められていました。20日過ぎには、黒滝地区で「滝祭り」が勤められました。この行事は、山岳宗教の行事で滝に打たれてお不動さんを拝んだそうです。滝もお不動さんの遺構も残っています。山内の各集落には、「行者講」が勤められ多くの信者がおられたようですが、明治5年の「山岳宗教禁止令」以後急速に廃れたようです。上の平の薬師堂の横には、行者堂があり、役行者や蔵王権現が祀られていました。

山内の人々は、山と共に生き、山の恵みに感謝の心を忘れず、山に対する信仰心は強く、山を大切にしました。亡くなった人を村里より高い山に葬り崇めました。

9月には、「風籠もり」の行事が勤められ、大風が吹かないように、神にお願いしました。

10月は農繁期で11月末の「イノコ」の行事で農の神が山に帰られます。

この日は若嫁さんが、親里に帰れる楽しい日でした。

山女原の集落では、この日は子どもたちが藁ずとを持ち若嫁が来た家のかどを藁ずとでたたく「いのこたたき」の勤めをします。勤められた家の若嫁は子どもたちにお菓子などをあげたようです。子どもたちが藁ずとでかどをたたく時の唱えごとは、大変卑猥な唱えごとで集落外から来られた若嫁さんはびっくりしたそうです。また意味も知らない子どもたちは大声で唱えたようです。山女原の「そば講」や12月8日の黒滝の「おおめし講」「餅講」などは、お腹いっぱい食べることの幸せを感じる行事で、現代の飽食の時代 食べ物を粗末に扱う生活を考え、恥ずかしく思える行事でもあります。

まだまだ多くの行事や民間信仰はありますが、調査や聞き取りはしているのですが、私のまとめができていないものが多く、文章にすることに時間がかかります。

以上の文章は、私鍋家渡支雄が多くの調査や聞き取りからまとめた文章です。間違っているところも多くあると思いますが、お許しを願います。

文責 鍋家渡支雄

誇りある 古老たちの生きざま

○戸田 悌三(大正9年8月生まれ) さん 山中お住まい

「ビルマで見てきたものは、すさまじかった」

大河原 生まれ

鮎河尋常小学校 尋常高等小学校を出てから14歳

丁稚奉公 20歳まで 京都に行っていた。

兵隊検査が20歳にあった。甲種合格であったために、昭和16年1月23日に、兵隊になる。

戸田さんの手



昭和16年12月8日 大東亜戦争始まる。

満州では、上官は厳しかった。

満州国に行く(2年)、しんきょう市南嶺に行く。陸軍二等兵(少年兵) 通信を覚えた。モールスフゴウ モスキートボイスを聞き取ること。ピピピ・・・を教育された。任務は、相手が言っていることをわかる。

日本が言っていることを知られてはいけない。イロハの反対をピピピでやっていた。

モールスフゴウは世界統一。

シンガポールから、指令があり、船でシンガポールに行く。ずっと通信兵をしていた。

昭和19年日本が負けてきたころ、ビルマに行く。サイゴンで終戦になった。(27歳)

戦場ではないので、通信兵 最終は陸軍曹長、ビルマはでこぼこがひどく、雨季にかかり、日本兵が沢山死んでいたのを見てきた。爆撃や銃撃で死んだ人を多く見てきた。忘れない。終戦後は、捕虜的に、米軍の仕事をさせられたが、無事に帰ってきた。

戦場に行ったら、アメリカとの規模の違いを目の当たりにした。

戦争は、人の心を破壊する。戦争を繰り返してはいけない。

○谷口久一さん(大正15年生まれ) 中の組にお住まい

「昔は近所でなんでも相談し合って決めていた」

山内中村生まれ。15歳の時に朝鮮鉄道の車掌に行っていました。東桂城、珍海に5年いました。

昭和20年7月に入隊しましたが、終戦を迎え、帰国。保安隊(主計兵)として、アメリカ兵と

もに終戦後の残務整理をしていました。その後、牛の鼻木づくり、松の木から作るへぎづくり、をしていました。

年をとってからは、会社勤めをしていました。

昔の遊びで思い出すのは、兵隊ごっこ、川に遊びに行ったことかな
昔は、なんでも近所で相談をし合った。



「おまえんところ、どうしてる？」

「わしは、こうしているけど、お前のやり方もいいな、いっぺんしてみるわ」

って感じで、夜に集まって、大根の漬物食べて、話したな。

谷口久一さん

いまは、それがいいからあかんのとちゃうかな。

農業も、「安いもの安いもの」言うて、化学肥料ばかり使ったいたから、昔おった生き物がいなくなってしまう。体にいいものをつくらうと思ったら、有機肥料やろ、農協もそこらのところを頑張っ欲しいんやけどな。

○野尻 清さん

「遊ぶの中での規律、子どもたちは地域の中で育った」

栄屋(嘉一 94 さんの祖父) 重吉 72、嘉兵治 81 さんが初代、清さん 4 代目。

明治 36 年～荒物屋、酒、たばこを売っていた。

県道ができたのが、昭和 2、3 年だろう。

青木ヶ瀬橋ができたのは同時くらいだろう。土手の土は、市場の勝負山の山土を運んだ。

山内村の役場であった。当時の村長は、野尻徳五郎さん。

土はトロッコで運んだ。高い勝負山が土が採られて、低くなっていたので、子ども達の遊び場になっていた。遊んだ記憶がある。冬は雪が今より多かった。

夏になると、セヶ淵という市場から笹路に抜ける淵のある川で飛び込んだり、潜水をして遊んだ。かなり危険なことをしてきたなあ。でも、昔は、遊びは上級生がしっかり下級生を教えた。いじめるワルはいたけど、今のようないじめはなかった。ガキ大将は、卑怯なことはしなかった。遊びを通じて規範と言うものが生まれた。今は、親がかまいすぎ、なのに自分勝手になっているところもある。

○黒川元一さん

「自分の家の井戸を掘った」

昭和 25 年 8 月、朝鮮戦争が始まった時、警察予備隊に入隊(自衛隊の前身、27 年～29 年保安隊、29 年～自衛隊)、山内に帰り、倉敷に行き、29 年まで工場に勤め、29 年以降は山内に帰る。35 年～丸五運送に勤める。51 年～大阪特殊鋼管工員をしていた。平成 11 年から、古文書講座に行きかける。

山内の国民学校高等科・尋常高等小学校(16 歳)まで、黒川に通っていた。

昭和 20 年 4 月 15 日に志願兵で、ヨカレン(海軍飛行予科練習生)に入隊。倉敷海軍航空隊に入る予定であったが、和歌山の高野山海軍航空隊に入隊。鈴鹿の白子の海軍航空隊、に行き終戦。戦場には行っていない。ヨカレンは憧れであった。

山仕事：木を切って、春に山で木を倒して(木と皮がむけやすくなる)、秋まで切る。冬になると用途別に、木を出す。昔は担いでいた。2 人、3 人と担いだ。木のそりで滑らせたこともある。牛

車や馬車が入るところまで降ろした。昭和25、26年ころ一日500円程度の日当。

昭和30年ごろの干ばつ時に水がなくなり、自分の家を掘った。亀山の弘法さんに聞いて、方角を聞き井戸を掘った。5尺(土)、4尺礫岩(とち豆)、3尺でい岩(青ぬり)、(1尺33センチ)一晩ほうっておいたら、井戸になった。今でも水は枯れない

○澤田久雄さん

「昭和20年 飛行機がないと聞いて、日本が守りに入っているのを知った」

5人兄弟、長男として生まれる。志願で、水口小学校で第一次試験(数学と国語)を受け、受験番号4番、数学90点以上だったので、国語は免除され、身体検査をし、二次試験に行けと通知が来て、京都の16師団に決まった。大津で二次試験を受けた。適性検査、判断力を問う筆記試験、

ヨカレンにも甲種(高校卒業程度)、乙種(尋常小学校)があり、昭和20年に入隊して初めて、飛行機がないことに気がついた。

大津で菊水特攻隊が「行く飛行機がない」と言って遊んでいたのを見

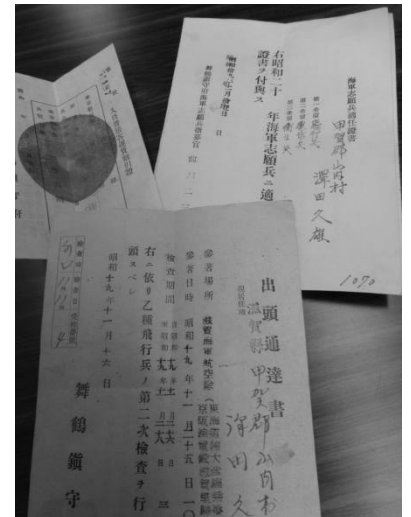
て、日本が負けていることを知った。「日本が守りに入った」(これはあかん)と感じた。

滋賀県庁(大津)の地下室に防空監視所の本部があった。千人針を大津の女学校の知り合いに頼んだ。秋に入れ、白子の三重航空隊、奈良分駐所(天理教)に入れと命令があったが、時期が早まり、

8月8日に舞鶴入隊の命令があった。行った時には、日本がもう駄目であると感じ、^{出頭通達書}早隊の

練習より、壕を掘っていた。指摘制裁は禁止が2年前

からあったので、あまり殴られたり、けられたりはなかった。



海軍では、海軍精神注入棒(1 m 2 0センチくらい楎の棒、だんだん細くなり、細い棒でたたかれるとみみずばれになっただけ)で尻を叩かれることはあった。5本 軍隊は5カ条(忠義・礼義・武勇・真義・質素)があった。陸軍は、5カ条だけでなく、前文、後文も暗記しろと言われた。陸軍のほうが規則はきつかった。

おさななじみでは、宮坂さんが、二次試験に難聴があったので、受からなかったのも、舞鶴の通信兵で回され、軍艦(駆逐艦 ふじなみ)にのっていたが、山内に一度帰ってきて、澤田さんに言った。

「海軍(水兵さん ジョンベラ)は、命がないだよ」

軍艦の名前がかわるので、今度は帰ってこれない」と言って出て行った。

フィリピン沖の海戦で軍艦は全滅している。

千人針(1 0 0 0人が同じ赤い糸で赤玉を作り回す、魔よけ、腹に巻いて弾を避けると言われた魔よけ)

○北林照雄さん

「ゼイタクは敵 欲しがりません、勝つまでは」

山女原生まれ、農業一筋、父親は小学校6年生の秋に病死。

兄は、海軍軍人として戦場に(昭和19年11月戦死)

母親一人の農業は縮小するしかすがなく、牛も売却される。国民学校高等科の私は、農繁期の学校での土日の利用等で手伝う。高等科2年生の時、陸軍海軍の少年兵としての全員志願が実施された。結果、合格、横須賀海軍通信学校への通知(6月入学)を受けたが、後日山口県防府市防府海軍通信学校への変更通知を受ける。然し、8月15日終戦詔書が発せられる。

それをもって家業である農業に専念することになる。それをするには、田地（特に乾田）では牛を飼う必要があり、農協の和牛貸付制度の利用にて、雌子牛を借受け飼育し、耕作作業、運搬作業に稲作、茶栽培、山林経営に積極的に取り組む。

私の少年少女時代 昭和6年 誕生の頃 満州事変

昭和12年山内小学校入学 支那事変

昭和16年12月8日 太平洋戦争没発

昭和20年3月 国民学校卒業

昭和20年8月15日 終戦

制約、節約での期間を過ごした世代であった。

○安村武一さん

「炭焼きには、勤と技術が必要」

当時は、長男は家業を継ぐと決まっていた。農忙期以外は、山林の仕事、夏は山の下刈り、冬は特に黒滝で炭焼きをする人が多くて、私も炭焼きをしていた。良質の炭を作るには、勤と技術がもと、火をつけるといったが、煙の色によって見分ける。また窯をこめるといったが、火止める時の判断等私は、戦争で早くに父親と別れたので、習う人がいなくて大変苦労しました。

○岡田正男さん（昭和4年生まれ）

「やっぼんぼんの白い山で遊んだ、楽しかったな」

住友電機養成学校を卒業、山内に帰ってきてからは、農機具を組み立てたり、売る仕事をしていた。

小さい頃の思い出は、「やっぼんぼん」で遊んだことやな

10メートルくらいの小高い丘で、粘土質でできている白い山で、女も男も滑ったり走ったりするのに最適の山やった。秋には山のものになっていて、最高の遊び場であった。



岡田正男さん

○小林善一郎さん

「研白道〔スリウスミチ〕から見た黒川の集落の光景は忘れないなあ」

今も残っている旧の研白道〔スリウスミチ〕が山中の通学路で、1年生から徒歩で通学した。

研白道の峠を越えると、山内国民学校が眠下に見える。そして、黒川の集落が見えた光景を今も覚えていて。当時は土曜日の通学で、山内中学校2年生の11月まで約8年間通った。戦時中には、防空の避難訓練のために、空襲警報発令の鐘が鳴ると、防空頭巾をかぶり、研白道の林の中まで、全校生が逃げて、空襲警報解除の連絡を待っていた思い出深い道である。

10代のころは、戦中戦後の小中学生であったために、学校から帰ると、風呂や炊事場の水つぼに水汲みをした。夜には隣町の中を、「火の用心、戸締り用心」と大きな声で、拍子木をたたいて、夜廻りをした。20代になると、食料増産の時代で、現在のような農機具ではなくほとんど人力による仕事をしていて。家には和牛や鶏を飼育していたので、農業は1年中仕事で、以前は大変な重

労働であった。

次の世代に伝えたいこと・残したいこと

礼儀作法 人の話をよく聞く 辛抱、我慢
自由を勝手主義にしない 何事にも挑戦する
昔の行いを古臭いで終わらせない
「おかげさま」「たすけあい」で生きている感謝
自然との共生、「生きているのではなく、活かされている」
女が強くなったことはいいが、男もしっかりしろ
戦争はしてはいけない 人の心がおかしくなる

親に黙り 勝手にはんこ

あの日の記憶

戦後70年 滋賀

国民学校を卒業してすぐに、草津の農学校に進んだ。食う物が無い時代で、先生から「農業せい」という教えに従いました。

十五歳だった戦前の春、農学校の先生から「特幹を志願せよ」と。特幹とは「特別幹部候補生」の略で、いずれ特攻隊員や。先生は「国民みんなが一丸になって戦わないといけない。行けるものは行ってくれ」と。言わんならささい、言っただけやと思う。真剣やなかった。

農学校で「特幹」志願

土山・野尻清さん(85)



「戦争はほんまにみじめ」と話す野尻清さん＝甲賀市土山町で

みんなが寝静まったころ、親に黙って自分で書類にはんこを押した。仏には、もう飛行機は真上壇の引き出しに隠してあに來るので、実はもうのこと知ってましたか。遅い。上空でピカッと光

「戦争はほんまにみじめ」と話す野尻清さん＝甲賀市土山町で
戦中はとにかく食う物がなかった。飯はまずいどころか、そもそもあらへん。農学校で人間のふん尿を食って育ったコイは糞殖池から盗んだことも。なんぼ取ったか分からんけど、全部黙認やった。先生も分かってたのでは。若いから、腹減つてしゃあない。カエルもへびも食った。こじきのような生活だった。食うことに対する思いは一番つらい。戦争はほんまにみじめなものや。

あの日の記憶

戦後70年 滋賀

海軍工作学校に志願

土山・上延悠紀三さん(86)



「毎日死にたいと思っていた」と海軍工作学校時代を振り返る上延悠紀三さん＝甲賀市土山町で



沼津海軍工作学校での上延悠紀三さん(後列中央)＝上延さん提供

山女原の山奥から、十五歳で静岡県にあった沼津海軍工作学校に入りまして。周りも勤めるのが上手で二日でも早く軍隊に行ったら案外できる。出世もできた。つうま

過酷指導「はよ死にたい」

土山・上延悠紀三さん(86)

終戦の年の正月に採用通知、いわゆる赤紙が来ると。今思うと、そういう知らせは、死んでからに構わへんって思えるよ。米兵の顔がはつきり見える。訓練は小学一、二年生科試験は小学一、二年生

ラジオがピーピー鳴るばかりで聞えなかったけど、古参兵が「負けたんや」と。仲間を抱き合ってたんだと踏んで泣きました。これでやっと家に帰れるって。終戦から七十年の夏。戦争を知る世代は年々少なくなっている。戦地や地元で味わった「あの日の記憶」を風化させないために、滋賀の戦争体験者に語ってもらった。

総評 山内回想遺産の取組みの位置づけを考える

立命館大学 金井萬造

回想遺産の取組みの関係させて頂き、山内地域と回想遺産について、振り返ってみたいと思います。スタートは地域の高齢者の介護予防を目的でしたが、全国的取組みが進められていく中で、非常に重要な取組みとの認識が広がっています。

(1) 位置づけ

高齢者の介護予防との視点以外の「地域づくり」の視点からは高齢者の知恵の井戸を掘り、高齢者が活動してきた時代の地域の生業・生活・環境・文化活動・人間の成長・人と地域の取組みの知恵の歴史的取組みのストックから学ぶという視点があると思われます。

更に、関係者の生きてきた社会の時代的变化から現在の地域社会と将来の地域再生の取組みの貴重な資源としての活用の視点があります。

回想遺産の取組みについての聞き取りの「テーマ」の設定の際に見方として、課題になりました。

時代は1925年～2015年の90年間であり、昭和・平成の時代に相当しています。

この時代に影響を与えてきた歴史を振り返ると古くの農業革命による農業・農村の展開を受けて、1800年前後からの産業革命の進展が里山の隅々に拡がり、生産様式・生活様式・交通移動手段の変化によって、ふるさとのコミュニティ・家族の活動スタイルが激変し個化・多様化・機械化・自動化・効率化が大きな進展を見せて時代であり、激変する社会変化の中で振り回された時代です。

ここにきて、人生をゆっくり振り返り、残すべきもの、伝えていくべきもの、捨てていくべきもの、等のふるさとの良さと改善・改良・向上と人々の絆・家族やコミュニティの新しい関係性の構築や地域の生活スタイルの創生に注目がされてきています。

21世紀も15年が経過していますが、1970年以降から、それまでの大量生産・大量流通・大量消費・大量廃棄の経済・生活スタイルは見直しが始まり、情報技術の進展や人の脳科学技術の進展という社会の革命が産業革命の展開と一緒に多様で複雑な時代展開の渦の中にいます。更に、国際化の進展と広域の連携やネットワークの取組みも加わって現在と未来があります。

そのような複雑化社会の中での地域コミュニティは地域の再生・活性化を地域の構成員の学び合いと共育の取組みを大切にして地域の元気・参加・先人からの学びと高齢者の活躍・世代間の知恵の伝承・知恵と技芸等のハイタッチ（知恵と情熱の取組み方）な展開の重要性が叫ばれてきています。そのような時代潮流と要請に対応した取組みとして位置付けられます。

ここで、今回の報告書の内容を再度、整理しておきたいと思います。

○対象地域一甲賀市土山町山内地域

○高齢者が活動した時代の回想一古き、良きふるさとの時代の振り返り

○聞き取りの視点一高齢者の元気で生活し活躍も併せて目指す介護予防

○地域の知恵遺産一文化遺産の価値・深化等の認識の共有化の取組み

(2) 調査・活動の成果

○山内地域の昭和年代（特に、昭和30年頃までの実態の把握を重視の生業・生活・文化活動・環境が高齢者の聞き取りと交流の会合で確かめられている。

○現在、地方創生の取組みがされている中で、ふるさとのコミュニティの現場で、コミュニティをベースにした取組みとして、「コミュニティ・ベースド・スタディ（CBS）な取組みの方法論は注目される。

○高齢者が自分で生きてきた社会状況の中で取組みの内容の話合いの中で確かめ合い・確認し合い・合意と納得のいく活動とその取組みの意義はおおきなものがあります。

○介護予防の聞き取りとして取り組まれてきたが、地域づくりに関わる教訓に触れられている成果も含まれている。その意味で、今後の地域創生の検討に必要な地域の目標・運営と経営・生活文化の豊かさ追求

・地域経済への貢献・環境の保全と活用等の視点と取組みに役立つ点の整理が求められる。

○地域づくりは地域の人々のふるさと創生に対する情熱（危機感）、人財養成、文化資本、安全安心の生活スタイル、交流と連携、地域経営等取組みの中での役立つキーワードの抽出整理が求められる。

（3） 課題の指摘—介護予防の視点からの地域創生への貢献を考える

知恵のストックの活用、高齢者の元気と参加・活躍する場づくり、知恵遺産の記録化・教育教材化・世代間交流と学び合い・世代化の連携したコミュニティ活動づくり・自然環境の保全と活用・自然学習への貢献等高齢者の五感を活用した心象絵図づくりと学びや地域の過去・現在・未来に向けての取組みに発展していくことを切に求めたいです。

更に、地域の特性・個性に根ざした食文化、地域生活の中で培ってきた技芸（手工芸、
伎芸、文化活動）、古い時代の生活スタイルの語り部活動、地域資源の触れるツアーのガイ
ド、地域のケア態勢への助言などへの高齢者の出番づくりにつなげていくことを期待し
たいと思います。

資料 聞き書き 原文

第1回 平成25年12月6日

自己紹介・山内の良いところ

(黒川生まれの野尻さん)

やっぱり自分の生まれた土地やから、絶対離れとうないし、昔から年寄りと付きおうてきて、僕は特におじいちゃんが長生きしたさかいに、昔のことをよう話ししてくれやった。

やっぱり、昔のことやさかいにどうしても古いことを昔の人は言わはる。

そういうところがいろいろ気に入って、地元を離れとうない。

長男やさかいどこ行っても構へんて言わはったけども、いたらあかんでよというようなことも言わはったけども、弟はみんな出てしまいよった。僕は六人家族の兄弟6人いるさかいに。そのうちの4人は東京行ってしまいよった。一人は京都行きよった。一人は女の子だけやさかいに亀山へ嫁入りした。

僕は、たばこを十六からはじめたんやけども、18歳のときに「清 なにかほしいか?」「なんでもやるさかい持って行け」、「たばこおくれ」て言うたらガーと怖い顔しやってよ。

それでも「ちょぼとずつ吸えよ」言うてくれはった。そこらはな、大事にしてもうた。「あかんやないか!」て言わはると思たんやけど、「ちょとずつ吸えよ」言うてタバコくれはった。そういうとこやな。

(山女原の北林さん)

山女原生まれの山女原育ち、井の中の蛙や

この土地から離れて仕事したこともないので、一番ここが大好き。心から許して話しができる、なにしても怒られへん、違ったこと言うても、笑て許される

根から怒らはらへん、怒ってくれるということでもなくして、考えた怒り方でしてもらえるので、もうここは、今ごろから離れるというのもないですけど、まあ生まれ変わってもここに住みたいなと思った。

(黒川うまれの落合さん)

僕が一番好きやというのは、まあ人情、これに尽きるんやないかと思います。私の先祖は、三重県の安濃、安濃田。落合というのがあるんですけど、そこらに多いというように聞いてます。

「お前のところはなんで屋号があるんや?」と。「私のとこの屋号はイサミヤという、勇という字に屋で勇屋という屋号をもらっております。もらっているというか、つけておられるというか。それは三重県の坂の下まで出てきたときに、そこで魚屋とちょっと役所勤めみたいなことをしもって、坂下まで来たということなんです。坂下こらここへ上がってきたときには、野尻さんのお世話で千谷(センダン)という土地に住まいをしたと。それから今の住まいを建てた。

私の近所もみんな、本当に、さっきも話にありましたけど軽く怒って、軽くほめてもらえるという、人情的な組に住まわせてもらってるというのが一番いいところじゃないかなと思っております。

(山中の小林さん)

落合：一緒です。

小林：自然が豊かでいいわな。

小林：私は妹と二人の兄妹ですが、中学校の頃では進学してサラリーマンに憧れていました。しかし、父に早く別れているので、家を継ぐため、卒業してからほとんど百姓をしていました。

(聞き手の猪鼻 中森さん)

昭和15年生まれです

私は兄弟は姉二人妹二人ですので、男は私一人ということで、生まれたときから田んぼやら山やら、そういった自然がいっぱいのところで育った環境から「どう

なんのかな〜」と思いながら長男坊やし、山もせんならん田んぼもせんならん。

そんなかたちで高度成長になる前のところへんで決断をしなければならなかった。その当時、親父やおじいさんは「山やったら 40 年したら切れる。長いところやったら 2 回は切れるわ。」というような話で、「それくらいやったら勤めやんかて家でやっていけるで」というような話で、「それやったら勤めるのやめて、家にいようか。百姓しようか。お茶もしたらええがな」と思っておったんやけども、昭和 40 年代になると、そのへんがちょっと見えてきた。まあとりあえずちょっと勤めてみようかというかたちで、勤めて大津に住んだりして。両親が年とってくるわ。家も誰も（いない）。やっぱり山内で生まれた、山内に帰るのかなと思いつつ、時代とともに 40 いくつでこっちに帰ってきたら、いろんな役が次から次と回ってきて、役をさしてもろて今があるんやけど。

なにがいいって、時代の流れとともに、自然があるものの、自然だけでは生活もしてけないし、田んぼや山も自然だけで生活できるものでもない。難しい時代になってきたな。

（聞き役 山中の小林さん）

山内のええところは、私は兄弟の長男やったんけども、実は本当は、出て行きたかって、ここの農村の慣習で残らんならんように仕向けられてしもたんです。

移民生活が流行ってたさかいにな、私も憧れたけども、田んぼもその時分では多いほうやったかもしれんけど、できひんで仕事に就かされて、あとはみなさんにご支援いただいたということで。そんな環境の中で生きていこうということは、よっぽど考えな、寂しいところがあります。

昔の人は、私は祖父母は知りませんし、親父と親子の会話もあまりなかったので、こういう山内のことを知りたいなあと聞き役ということで寄せてもらいました。お願いします。

山内の路

山内の中心は道路の関係で中心がどこになるかって言うと、中の組になるんやわ。というのは猪鼻の峠、今の米倉さんとこの上を通過して、あの峠がもっとでかかった。

「山の上にあがって。かにが坂からあがるのが大変やった。」ことを親から聞かされた。

天秤棒を担いで通過してやる。

（東海道の路）

これは東海道の話、それが下りてきて、米倉さんとの下を通過して、猪鼻の街を通過して、湖国興業のそこあの道に出る。黒川橋はなかった。昔、大八食堂ってあったやろ？

山中のあっこから向こうに鈴木さんて家があった。あれを抜けると野尻に出る。

今も道は残ってるわ。野尻を下りてくると落合ってところがあるやろ。そこの落合。宮さんの下よ。

田村川と笹路川の合流したところを落合という。

そこにぺんぺん橋というのあってな、幅がこれくらい（20cm）の板が置いて、そこを渡って大宮神社の下を通過する。

それで宮さん（神社）からずっと上がってくると、上まで上がらんと農協の倉庫にでた。農協の倉庫を上がってくると、集落がなにもなかったで、そこをあがってくるとお寺、長松寺があった。

通過する時に、先のほうに川の傍に宮さんがあり、山にあがってお寺があった。あれを抜けて紺定さんの裏を通過して、中の組に行って中の組をからセンガリを通過して

鮎河へ行った。

(猪鼻の名字)

山内に入って一番(初め)の猪鼻はな、私の聞いているのには、寄り集まりやと。

色んな名字でバラバラやろ?

中森:そうですね。

六十軒はあったんやから。

中森家というのは昔からあったんや。辻があり、福島あり、青木があり、久木があり、清水がありしてバラバラやねん

東海道というのは、湖国興業の下をかって山へ来るといのが東海道やったんやで。

それで猪鼻の集落があったんやで。

あそこに火頭古神社があるわさ。その時分には長松寺というのはなかったんやわ。大日さんのはたに何やら地蔵さんみたいのがあって、庵やってん。おっさん(お坊さん)ござらへん(不在)かってん。それが道があったさかい(必要であったから)にあっこに建てよということで、小西観道の上のおじいさんがあっこに建てやってん。ほんでに新しいわな。今から350~360年前やろか。あっこのお寺のうちの位牌全部調べてもらって、350年以上前はないわ。それまでは庵やってん。それで殿さんはそこにいやってんわな。

おそらく。

黒川:長松寺という寺は、大日堂の御守するために建てた寺とか、庵とかそういうことが書いてあった。

(中の組が中心?)

中の組はものすごう、はやとったんやな。

ほんでにマトバっていうやろ?もとがたもとの家を。的場というのは武士があそこで弓を射るわけやね

ん。ほんでに中の組が中心やねん。

中の組から上を眺めてみたら、うえのひらと書いて上の平やねん。昔の人はみんな日向向きの道ばかりやった。

山の北に絶対道はついてないわ。全部ひなた道。

それで川の西やで川西や。

市場というのはなんでかというとな、そこで市場をしはったんや。物を売る。市場は商人のまちやねん。中の組を中心として、上をながめて上の平、川下をみて川西や。

川を中心としてや。

寒所の道はなかったわけやな。山中から鈴木さんそこを超えてたんや。

野尻:そうそう。今でも道があるわ。3メートルくらいずっと山中にある。

山中と川西の間に山道が残っているんや。

妍白(スリウス)より、もっと西。

そこの灰山っていう所に低い谷がある。そこやと思う。そこを下りて野尻の下へ来て、今の落合にでる。

川見たら右側に山があって、あれは寒所やな。こっちみたら野尻という山やわな。その丁度谷間や。

なんで寒所って言うんやろなあ、それは寒い所やでやろ。

(川西のこと)

落合:野尻に基盤整理したあとやけども、鈴木さんという家の田んぼの中に、昔の道のあとが形のまま残っている。田んぼに水をつけたとき、乾燥した時、現れる。

落合：寺は妙蓮寺のほうが先やと聞いているんやけど、なんで妙蓮寺のほうを通らんと長松寺の方に行ったんやろ。

野尻：坊垣外おっさんがいっぱいやってな。坊さんの垣外やで。長松寺というお寺はなかった。

大日堂は知ってますよ。中は見た事ないけど。

堂は大きかったで。

今は小さいけど、大きかったし門があったし。

立派な門があったんやで。

野尻：谷本留吉という人が黒川の役している時にとてもやないけど守りができやんで、門を買ってくれと草竹の社長に言うて、買ってもらいよってん。門を。

昔の保育園のところでしょ？

野尻：昔の保育園、今のイチョウの木があるところそんで階段が五段あって、両脇にずっと一列あってん。役場やないねん。集会所やってん。それを役場が使ってた。

金井：中世のときからお伊勢さんとか鈴鹿を超えて、来ますよね。商人とか信仰とか。その時の道と、さっきの東海道、指定されたのが1901年くらいですから、中世から何百年と経っていますよね。集落ができて、街道ができて町が大きくなっていったというのは、もちよっとあとですよ。江戸時代ですよ。どのへんに道をやるかによってだいぶ違いますよね。歴史の本を読んでいると、すごく急所やったと。箱根の山くらい急所やっただということが書いてあるんですよ。

??：

東海道は、猪鼻の、トンネルがありますわな。あの上ですよ。鳥居があったというてる、若宮神社の鳥居があった場所が旧道やと。それを歩いていってずっと急な坂を降りんならん。

金井：江戸時代になって街道筋ができて、その手前の

土山のまちが変わっていくわけですね。その間に集落が発展して行って、町が変わっていったんですわね。

金井：そういうときの、山内ができたところにもう少し時間を取らんとあかんよね。

(街道筋としての山内)

野尻：山内の人間、ほとんど3分の1くらいは、伊勢からあがってきてる人が多い。

黒川の人は大半は坂下の人やったって言いますな。そやから交流は江戸の前からあったわな。あの鈴鹿の峠をようあがってきやっただって感心するわ。

あと山女原をぬける安楽越えもあるんや。

さっきの「山内」って地名はなんでやろうってときに、山中村っていうのが大きくて、当時合併の時に、山中は山中村で山内ではあかんと、山中という形でものすごく押しとったみたいやな。黒川からこっちの人は山中ではあかんのやと。ほんで折衷案みたいなもんやわな。「山」をとって、真ん中に「内」をつけて山内村になったみたいやな。

みんなひとつひとつの村やったんやでな。

そうやそうや。猪鼻は猪鼻村で。

山中は小学校があったんやで。笹路と山女原にも学校があったんや。

黒川の人間はお寺に行ったんや。

(??)

砦っていうんやろ？

だいたい砦って言う。

中森：猪鼻の上に砦があって、あそこから水口の岡山城は一望できるわな。猪鼻の砦は伊勢から侵入するの

を防いどった。

金井：時期的には戦国時代ですか？

中森：そう。戦国時代です。

金井：1580年ごろになったら、豊臣家と徳川家の関係があって、東からの攻め寄せで1600年ガラッと変わるかけですよ。

中森：平安時代に人が増えてきたわけで、それで砦が必要となって、山中にはお城があって殿さまがおられた。というところで名残があったんやけども、伊勢は伊勢で攻めてきよるわな。

金井：三重の方に力を借りたいときもあったやろうし、やっぱり年代別に分けて、戦争とか商売とかそういう時代と、街道がちょっと落ち着いた時に、どうなるか、成り立ちなどが違うので時代別に分けたほうが分かりやすいですね。

金井：山内はすごいところやと思ってますよ。東海道の街道筋でもあるんですけどね、鈴鹿、三重のほうとも国が違うわけですよ。境界で攻めたり攻められたりする中で変わってきたし、街道筋から街が大きくなっていくわけですよ。それとは別に、鉱山関係などなにかあると思うんですよ。

中森：三重県と滋賀県の境界の鈴鹿峠で、三重県がよけ土地をくっとなんと思うのは、峠というのは尾根があったら尾根で境界線やのに、それが鈴鹿峠のところは立て場があってお墓もあるし、坂下が強かったんやろな。それで坂下の商人の墓は滋賀県側に建ってるわ。それで境界分はこっち（滋賀県側）にきとんのや。滋賀県は「取られたな」っていつも思う。

金井：おっしゃるとおり、坂下のむこうのほうの力が強いので、多分町も影響があると思うんです。住んでいた人も。そういうのも面白いと思うんですよ。

魚とか塩とか、こっちはあらへんわな。行商で買って

たわな。

北林：魚屋いうたら、三重県の魚やしあへんわ。

金井：僕も彦根ですけど、10年前まで売りに来てましたよ。伊勢の魚って。

金井：山の文化とか伝承とかは、山から来ますからね。

「灰山」という山があって、それを下りていくと川になってるんです。僕等子どもの時分に川遊びしたときに、石炭口というたんです。それで、鉱山とか全然縁のない山ではないんやないかなと思ったんです。

うちの山が灰山やってん。そこで石灰採ってやってん。

金井：経済的にはそういうことやったと思うんですよ。

石炭口と言ったのがあったんです。先生が鉱山の話をしかけやったときふっと思い出して。

金井：それは一つの大きな視点なんですよ。

金井：山内は非常に歴史の伝播したところやから、学んでいくとおもしろいことが出ると思うんですよ。だけどそれは今の人は僕等を含め全然知らないから、今の高齢者の方から伝承してもらって、次に伝えていかなあかんと思うんですよ。そういうとこなんですよ。江戸時代も街道筋ですけど、中世もすごい道やったんです。それはすごかったと思うんですよ。私たちはそれに関心を持たないから・・・。

今日はキーワードがでたから、川、村などで整理して、そして年代を分けて、村同士の関係とか、三重との関係とか面白い点がでてくると思う。

そういうときもあるし、だいたい800年頃からカンドウがあるんですよ。東山道とか東海道とか。その頃から道が始まるんです。大きな道ね。それが1200年1300年ころ。それが900年くらいにいっぺん潰れるんですけど。それが鎌倉とか室町になるともうちょっと進ん

できて、それが江戸時代 発展していくんです。林業とか農業とか。やっぱりいくつか年代があるので、各集落の名前に関係してるんで、それに山とか川とか道とか整理していくと、ものすごい地域が分かってくると思います。それとさっきおっしゃったように、三重とのつながりがすごくあったとこやし、それだけでも大変なことやと思います。

一代先に話しが出てたら、もっと聞けたと思うんやけど。

僕らの親とかに。

金井：今がほんと大事なんです。今聞きとっとかんとほんとダメ。

金井：あとなんとか町史とか土山町史とかありますか？

竜王：黒川城址、あと山中はここ（小林さんの資料）に載っているんですか？

小林：ほらみんな載ってますよ。山中の始まりから。

金井：そういうな記録があるんですか？ぼくら整理できたらいいね。あるんだったら。

金井：今日は素晴らしい話を聞いたんですけどね、この図面と言うのは時代は一番最近のやつでしてて、全部隠れてますんでね、まずはお聞きしたやつで、川とか山とか、道なんて最近ですからね、ですからそういうことで道にあまりこだわらずに

金井：応援団としては、行政とかに仕えているんで、ずっと詰めていきながら、生きた話をみなさんから教えてもらって、整理をしたいと思いますし、全部が全部できるわけではないんですけどね。これは絶対山内の将来にとって伝承せんならんということにしぼって、もう1回やらしてもらったと思うんですけどね。名前がなんで出てきたていうのは、ちゃんと歴史があると思うんですよ。それをつきとめて関係性もたどっていきたいと思いますし、そのへんぜひお願いします。

塾だとか、その前からありますんでね、それを整理し

てるのと、やっぱりそれとの関係と街がおこってきた、宗教とか神社とかお寺とかができたとかその辺を整理してるんですよ。

それはアイデンティティというんですか、DNA っていうんですか、山内の地区でやっばしブランドなんですよ。誰もまねできないブランドなんですよ。それをもう一回発見してやっていけば、街を大事にしてやっていこうと、伝えていこうと、教えてもらって先代の知恵を伝えて次の代にもって行って、発展して行ってほしいと思っているんですよ。

今はそういう時代に入ってますんでね。みなさんが一生のやってこられた成果を少しまとめて、次の世代に送れるようなものにしたいなとこう思ってるんですよ。ぜひよろしくお願ひしたいなと思います。

第2回

12月20日(金曜日)

昔の暮らし 衣・食・住、昔の冠婚葬祭を中心に

昔は食事はテーブルで。茶碗二つ、おてしよ〔皿〕。蓋を裏向けて茶碗置いて、輪になってご飯を頂いた。

おつゆ、三升くらいの鍋。かぼちゃ、一度炊いたら一日中食べた。服も兄弟で順番に大切に使っていた。

家族が一緒に食事するときは、長男、次男の場所も決まっていた。

クルミ膳なども。

台所の一番下には場所が決まっていた。

昭和10~30年ごろまで。

ご飯が食べられるようになったら

家族がひとりひとり箱膳を使って食べていたわ。

その中に食器を入れて、毎回お茶で最後まで残らないようにしていたから、毎回洗うことなく、洗うのは盆正月くらいであった。

洗わへんかった。

米は農林六号、八号、アサヒ二十号が主

手で刈っていたから、稲かりは11月くらいであった。

霜が降りてて、稲刈りしてたこともあったわ。

調味料は家で作るのが当たり前

大豆から味噌、醤油、を作った。

味噌部屋があっつてな、味噌をつくるために大きな杓子でかき混ぜる仕事は子どもがしたわ。

塩と砂糖は買っていた。

蛋白源は、うさぎを食べた。

兎のさばき方の講習が地区であっつてな。

ここにいるものは兎をさばける。

兎の眉間に衝撃を与えて・・・

鶏もさばける。

今でも20分あればさばけると違うかな。

豚も飼っているところもあった、もちろん食べるため

卵なんて食べられない、病人が食べるものやったわ、

弁当は日の丸弁当

梅干し、辛い塩鮭、なすびの漬物

ジャガイモの煮つけがあったかな

(行商が伊勢から来た)

魚は、伊勢から売りに来るもの
イワシかな

ガスなんてないから、オクドさんで火をくべてご飯を炊いたわ

これは女の人の仕事

柴作りも女の人の仕事

家の上には 柴を組んで上げていた。一年間に使う柴は一軒に300俵が平均

それには、鹿の角を使って引っ掛けて上げていた。

家の間取りは大体決まっていたな。

蔵もある家はあった 西北の方角が多かった。

山のおやつ

クワイチゴ 四月～五月

クワイチゴは実が黒かった、

キイチゴ 五月～六月 キイチゴが一番甘い

ツルイチゴ 六月～七月

水

水は、井戸か川から取っていたわ

子どもは井戸から、水をくみ上げて、甕（カメ）に入れておき、日用の水にした

水くみは小学校二、三年にはしていた

黒滝では井戸は出なかったけど、生水があった

段段と上から、飲料水、野菜洗い、洗たくと用途を上から順に使った

これは昭和40年代くらいまで続いていたのじゃないかな。

風呂

一晩おき

もらい風呂がふつうで風呂のある家に近所の人がある(風呂親類あった)、自分にまわってくるときには、風呂の水が無い状態

足くらいまでしか水がなかったも、暗いから水が汚くてもわからへん

あかりがついているのは、みんなが集まる所だけやしな

冠婚葬祭

葬式 もちろん土葬

家での看取りが当たり前、

危篤状態が続き、お世話しているものも疲れ果ててきたとき、親戚の人が、「長禅さんで水をもらって来い」と言われて、病人の子どもでないものが、日野町平子の長禅寺に水をもらいにいく。

その水を飲んだら楽に参れるって

でもな

その水に、和紙を細かく切った紙が入っているんや

昔は、長く家で患っている人の家族が疲れ果ててくるから、見かねて安楽死の方法の一つやったんや

第3回 1月10日

昔の遊び

黒川：めんこで遊んだ

めんこは男の子、竹馬、冬はそり、

リンゴの箱、雪が降ったら、村の人に叱られたが、や

った。

妍白〔スリウス〕の坂が一番だった。

村の者が小学校1年生から6年生まで、昔の親は何をしていても自由に遊ばせてくれた。

高畑山のぼり、川をプールにするのも、子ども達が作った。

七夕の時に、矢倉を組んで、七夕を焼く。

親は見ているだけ。川へ行ったり山へ行ったり火遊びをしたのを見守ってくれた。

ガキ大将、上級生は大将になった。

字では10人くらい。

各学級にススキ藁をひっくり返して、ネズミをとる。

ハサの藁を取る。

柿をとる。

女の子を泣かす。

小学校で、押し入れに女の子を閉じ込めた。

女子はあやとり、お手玉をしていたな

小学校での罰は廊下で立たされる。

拭き掃除は、雑巾(毎日)、

藁で拭いたこともあった。

拭くのがめんどくさいと、バケツをひっくり返してしまふこともあった。

机、椅子は学校にあったもの。

机の修理をしているのを怒られたのを覚えているわ

校長先生に流行歌を歌って怒られた
担任の森田先生、と校長先生らが、修理をしていく
れた。

帽子はな、ひさしを織って、油を塗る。
自分らの子どもの頃（昭和 10 年代）服がほとんどで
あったが、着物を着ていた人も覚えているわ

みんなお下がり。

鞆は、家で布で作ってくれたもの。

教科書は、お下がり。お金

昭和 5 年生まれで 40 人

昭和 10 年生まれ 52 人(疎開者もいた)疎開者は、
昭和 18, 20 年ころが一番多かった。

昭和 50 人

教室の床にごみ箱があった。
何のためかわからない。
机は二人掛け、硯をいれる箱があった。習字の時間は、
週に 2 回ほど。

お昼は弁当。学校に近いと家に帰った。

家から野菜を持ち寄せ、学校で味噌汁を作ってもら
った。

弁当の話：火鉢(四角い大きな火鉢)のまわりに弁当箱
をおいた。何が弁当の中身かわかった。

高等科では農業の時間があって、農業の先生がいた。

持ちあがりの担任もあったが、基本は 1 年交代。

下宿している先生もいた。
修学旅行は 6 年生の時に伊勢参り。バスで行った。

山内は、「岩戸屋」に泊った

昭和 6 年生まれから、戦争がひどくなり、修学旅行に
は行っていない。

戦時中、いなごを食べてまずかったのを覚えている。
ハチの巣、(幼虫)を食べた。

学校でさつまいもを作った。すじばかり。

やぎ、うさぎ

中学校でも、小学高学年がしていた。

肥料は、人糞。こえもち。

3 月頃、学芸会。学年ごとに演劇をする。青年会の人
と部落を競って、出し物をしていた。部落によっては
行、青年会かつらを借り熱心にされていた。地区別、
講堂がいっぱいになった。

試験もあった。成績は、優良可
落第は、少し前はあった。学校に行けてなかった。

農繁期は、学校が休みになった。(昭和 5 年)
家の都合で

結・かたみがえし、(手伝いあい)

講、農業を一緒にやってやり返す。
代わる代わる 講はひとりではできないことを
盆踊りはあったが、青年団の人がしてくれた。
地藏盆は、小さい集落であった。
運動会は今と一緒に学区民運動会であった。障害物レ
ースがあった。はしご
すっぽんたび(既製品)、買ってもらえないとはだし。

第 4 回 12 月 28 日

戦争体験、戦争の頃の暮らし

戦争体験・戦時中（昭和16年～20年）

兵隊の経験：

黒川：4カ月わたしは4月15日予科練に入った。

杉本：7月15日入隊決まっていた。山口県へ。8月20日に変更になった。

澤田：8月8日。海軍志願兵。舞鶴。→通知あり

奉公袋。召集令状はおやじが配り歩いていた。

死ぬことが何とも思わなんだ。名誉やと思っていた。

上の平への聞き取り・ビルマのインパールなどから帰ってきた人がいた。戦争に行ったら、死ぬのも生きるのも何とも思わなかったという。

「負ける」と口にしたら、いっぺんに捕まる。

落合さんの子どもの頃。

落合：兵隊を送りに行った。猪鼻まで。大宮神社にお参りに行った

神主さんが昭和20年、正月の寒いのに、水行してはった。日本が勝つのに祈願していた。川で火焚いて、寒行。

志賀町和邇、もどりぎ神社へお参りに行っていた。電車で。

上の平の寺では、残っている人（女性・銃後）たちが竹やり訓練をしていた。

終戦の昭和20年5月。

青年学校、陸軍教練。

満州開拓へ、昭和20年ごろか。

小学校ではな、空襲警報が出たら、運動場へとんででる。

飛行機は津へ飛んで行った。山が真っ赤になっていた。

防空頭巾はかぶっていた。運動場は芋畑ばかり。講堂付近に奉安殿。

大宮神社に奉安殿移築。

戦争で亡くなった人をまつる建物として利用されているな

竹やり、沖縄上陸し、本土決戦のために行われた。

青年教室にそういうものがおいてあった。

だんだん戦闘機を作る金物がなくなってきた

大日堂付近に釣鐘供出で、たくさんの釣鐘が供出していた。

昭和20年学童疎開。長松寺、宝泉寺にもいた。

米供出、

田んぼへも調査に来た。検査院昼休みの間に、粃の中へいれて。

ちょっとでも、取り分を多くするために、知恵を絞った。検査官は地元の人だったが、そこまで配慮してもらえていたかどうか？

戦争のときは、百姓が多い。

ゲートルまいて、靴はいて寝ていた。すぐに出ていけるように。

供出は米のみ。

空襲警報、警戒警報。

電波障害するために、飛行機から落としたりしていた。監視省。大原なすが原の上あたり。

怖かったのは、機銃照射がこわかった。
爆弾は、東レ、八日市、瀬田付近。四日市がやられた
時は、黒滝の山の向こうが赤く見えた。

数えて16歳の頃、四日市の焼け野原を見た。

女の人も軍需工場へ徴用されていた。四日市、亀山

教育

英語使わない。

「音楽」は「歌い方」といった。唱歌。

上の人の使いまわしは、黒塗りやった。

戦後新聞くらいの教科書。切って自分でとじた。

勉強は出来なかった。本は貸し借り。

先生こわかった。職員室入るときは、名前を全部言っ
て入らないといけなかった。

(戦没者)

支那事変で死んだ家、村が手伝いに行った。

爪・毛髪は入れなければいけなかった。形見に。
戦死知らせるのに、行き手が無かった。

シンガポール陥落のときは、旗行列した。

召集令状、

村で何人決まっていた。

鈴鹿の航空隊、グラマン機銃掃射、警報もない。

夜間訓練。てんとうくさの中に入って、難を逃れた。

特攻、水杯。鹿児島。
舞鶴、神風。

防空壕堀。

予科練と言わず土方仕事ばかりしていたので「どかれ
ん」といわれていた。

予科練→甲・乙 特別幹部候補生は誰でも入れた。

一次試験に合格したら即入隊。予科練、1次試験、2
次試験3日間通らないと入れない。

小林さんのおじさん予科練に行っていた

昔の農耕→民具を用いて話す

山内、山の暮らし・水の暮らし

昭和初期

昔は林業をされていた。炭焼き。戦後。

植林しない。あと植える。

材木伐採。荷車に積んで、山女原から白川橋まで
山で製材した。

山大工。夏伐る。台風待って、川で流して、五瀬の川
原で組んだ。皮が採れる。9月から10月ごろ。くだ
流し。一本流し。川で運んで琵琶湖まで。

強制伐採、戦時中。お金はほとんどもらえなかった。

鋸は紀州物。大野あたりが分岐点。

尾根から切った。

山師、そり、キンマ

鍛冶屋、市場に2軒あった。野鍛冶。

さこうどや。紀州。

第5回 平成26年1月19日

昔のおやつについて

昔のおかきは大変であった。

1目一たるの板があった。昔はながたんであった。

あられは薄くしてあられいい米(もち米)

団子は悪い米でしたゆるご(くず米)

食べる時期家族で田んぼに行くときは、ゆるご

あられは、おやつ

あられ煎りがあった。

けしがら

入れるモノによって、味が違う

二升一白を、十白くらい作っていた。

ゆるごを挽いて、蓬菜に流して

黒砂糖を削って、

正月は、3升くらいしていた

縁側にムシロをひいた

90センチ大のし代があった。

安政3年(林鐘)

餅を蒸すのは四角いセイロ

干し柿

11月にしたらカビは生えない

昔はおばあちゃんの仕事であったが、剥いていたら、手が黒くなった

柿は干し柿ようがいい。

そら豆、黒豆を炒った。おばあさんがお菓子は黒砂糖水をくんで、白い豆を炒ってたべさせてもらったことを思い出す

中耕 早く終わりたいから、ずるいことをした

早いうちに帰りたいかった。

子どもたちは忙しかった。

運動場が畑であった。

学校が、勉強する場所でない。

運動場は、2/3は芋やかぼちゃ

芋は17, 18年ころ

教練も運動場

いなごに熱湯をかけて、炒ると足が落ちて、だしが出る。

おけすい、**ゲジゲジ**を食べた(春から夏)

食ってもて、食べられるものなら、なんでも食べた

とにかく腹がへった

いりこはもち米が本当、いりこなはもち米が玄米を炒って、粉にすること

はったいこ は美味しい

はったいこに渋かき……

勝負山に芋や

なすびもキュウリもなまで食べた

新聞紙に塩を持って友達と遊んだ

昔は肥満児はいなかった。

卵はあたらなかった。

見舞い行くと卵

めったにあたらない(もらえない)

黒滝は蚊帳の木があった。

大きな栗の木が、黒滝はあった。

いたどりが子どもには石をぶつけて、すももをとった

七が淵に飛び込む

石を持って川の中で潜ってリレーをした。

昔は事故なんてなかった

川西と市場が六分団

昔は石で止めた

学校の先生

昔の先生は、竹の鞭で叩かれた。

鞭で叩かれたらとても痛い

小西先生に習字

父兄が学校の先生に文句をいうことはなかった。

連帯責任

昔はチャイムではなく、リンであった。

昔の先生は、厳しかった。

講堂の裏に安寧殿があった。

夏休みに学校の床下の遊びをしていたら

起床ラッパを鳴らした。

市場・川西区は、大宮神社にお参りもした。

竹の皮、手の甲の上において、遊んだ。

大宮神社にどんぐりとしいのみをひらいに行った。

それをせっけんにした。たくさん貯めたら、運動靴がもらえる

それをたくさん取ろうとして、川の中に入ったのが冷

たかった

どんぐりは、どもりになると言われた。

正義の味方のボスがいた。

学校の登下校

分団でボスがまとめていた

今は、平等しすぎる。

昔は絶対服従であった。

教育の方法が自主性を大切にしていた。

姑 ヒノキの柴は嫁起こし

オクドサンで、嫁が5時には、起きなければならなかった。

姑嫁さん無口でも怖かった。

嫁にもうてもらった

男が少なかったから、女は相手が行った。

自分の子どもを売り 食い口を減らす

どぶろくは闇で作った。

酒飲みは下手であった。

酒飲みは、味見が多い。

密造、竹やぶ等で作った

昭和25年位まで闇でつくっていたな。

神社に揚げる酒はなかった。

配給の酒を採りにリアカーで大野に行った。

ご飯は3杯、4杯食べた。

おかずがなくても食べた。

昔は米が取れなかった。

酒は薄めて配った。

とういちとうにとうさん(酒の度数の話)

酒のあては、いえのおかず、だしじゃこくらい。

第6回 平成26年2月5日

民具とともに 山内小学生3年生との交流
子どもたちが、民具の使いみちを古老の方々に教えて
いただくという設定

わらブーツ>

一ぼくらの呼び名では「さるぐつ」と言うたと思てます。ぼくは戦時中に2年ほど防空監視所に勤務してました。そのときにどなたがくれたか知らんけども、これが一足届いてました。2月3月になるとものすごく寒かった。それで足は冷たいのにこれ履かしてもらうとありがたかったな～。ええ思い出に、この温もりは今でも足の裏に残っております。

一歩いたりすると、一ヶ月もするとダメやと思いますわ。

これ履いて勤務した。

一販売はしてない。勤務してるのが6時間で、2時間通信、電話のやり取り、それから2時間はりっしょうだい、飛行機の音がすると「どこどこバコン東、高度推定は3000」とか言うて報告すると。そのりっしょうに立ってる時間にこれがありがたかった。下から風が上がってくると。高い建物の上に、下が板張りだったんでね。

高枕

この(枕)の上に、もう一つ綿が入ったのを置いて、こんなもんで寝られんのやろか？て見てたら、昔は日本髪を結うてやって、ほれで日本髪は潰れるさかいに首の後ろにこれをあてて寝てやった。そのおばあさんに大事にしてもうたでな。

一ここ(首の後ろ)にちょっと当ててな(左右首が動かす)、(髪形の)後ろがぼこっと出てるで。男性はない。男もできんことはないやろけど、昔のちょんまげやったら。

うちのおばあさんはこれをしてござったわ。

おばあさんは昭和の5年か6年に死なはってん。

防具

一これは剣道の防具やけど、腰に巻くやつ。

一こどものときようけあったがのう。

一ここ(胸のあたり)に、もう一つ胴衣があって、それとこれをつけて、面を被って、それから小手を腕にはめて。

一学校で教えてもろてん。その時分は小学校も山内・鮎河・土山・大野とそれが土山の小学校の講堂へ行つて、それで試合があった。それも??で出て行って思い出がある。

小学校の時の思い出ですか？体育の授業の。

一うん。そうや。ここ(防具の下の部分)に山内・鮎河とつけて。なかなかおもしろかった。

剣道部！？そうですか？

一強いことはなかったけど、推薦しよがんで、毎日欠かさずしてたら推薦状がもらえてん。

段をもっている人とか強すぎるわ。

一先生は6段やったけどな。

鐘

一学校の始めに鳴らす、それから休み時間、また学習の始まる、その度についてやったんを覚えています。特に覚えがあるのは、私等は山女原からテクテクろ揃って(学校に行ってた)

3回くらい鳴らすんですか？

一何べんでも鳴らす。何回で決まってたんちがうかな？と思いますわ。

一1時間の授業の中で、10分間休憩があるんや。50分経ったら鳴らさんねん。それで時間きっちり、2時なら2時に鳴らさんねん。

チャイムですね？

一サイレンの代わりや。

これは学校のどこにあったんですか？

一中庭の角っこにあった。学校に一つ

用務員さん以外に、先生とか子どもさんが鳴らすの？

一届かへん。上の梁から、これ（鐘）がぶら下げてある。

一特に思い出は私らは山女原から、みんなが揃って約1里のところを歩いて行ってた。始め「みんな来いよ〜」言うて大勢が山女原のお地蔵さんのところに集まった。大きな声で遅い人に「もう行くよ〜 はよ来いよ〜」と大きな声で怒鳴って、それで揃ってぞろぞろ歩いてくると、当然きっちりと1里の道を歩いてこんならなので、そうきっちり早い目には来られない。そうすると森下橋、ここから行ったら2・300m先のところへんで、この（鐘）音が聞こえるんですわ。「もう始まるぞー。はよ走ろうー」とぐわーっと。

学校の中だけじゃなくて、結構聞こえるんやね？

一おれらはな、これが鳴ってから学校へ行くねん。

山女原は笹路から来なあかんから。

時分とき以外でもやるんですか？火事だとか。

一なかったな。

サイレンはあった？

一サイレンはあった。戦時中はこれ（鐘）を鳴らしてた。チャイムやなくてサイレンはあった。

一スリウスのでっぺんでも聞こえる。この音が。授業中に冬になると水たまりに氷が張って、滑って遊んだ。それで鐘が鳴るとんの分かつんのやけど、帰らんと遊んでた。

いい音ですね。

一家で遊んでたかて、鳴って飛んできたら間に合った。

次は誰かな？しょうじさん。

バリカン

一私は小学校のときには、ここの澤田散髪屋さん、おすえさんて言うんやったかいな？名前な。あの人に散髪をしてもらった。これ片方折れてるわ。

それは小学校のときの思い出ですか？

一小学校のときの思い出。

何年ごろまで使われてたんですか？

一昭和10年ぐらいやな。これは両手でやるやつ。その後片手でやるやつが出たで。

庭の剪定みたいですね。

一そやそや。昭和5・6年頃から流行ったんちゃうかな。

一これ研いで、油さしたら動くで。

ありがとうございました。続きまして安村さん。

一鐘なんやけど、わし便所に入っててよ、ほったらこれ鳴ってん。すぐ出られへんわさ。とんできたら、「何をしてた？」って先生に聞かれてたことがあった。

小学校のとき？

—小学校5年生。すぐ出たらよかったんやけど。その覚えが一番強烈にある。

この鐘から、お便所に入ってて出られなかったという思い出ですね。

—立たされはせんだけど、たんと叱られた。なんぼ弁解してもあかんだ。

これが鳴ったら緊張するもんなんやね。

—他にも（思い出は）あるけど一番強烈なのはこれ。

試験が終わっても鳴るんですか？

—ほら鳴る。休憩になるときには。

じゃあ安心というか、みんなこれで遊べるという（気分になるんですね）

すごい大きい音やなあ。

—学校中分かったわ

—（鐘に）昭和11年で書いてあるんやわ。昭和11年というたら、僕（野尻さん）が、小学校入ったとき。そのときに新しい校舎ができたんや。

みなさんにとっては、これが思い出のもんなんやな。

その時、そういういい物が手に入ったんですね。

それ（手で持つ鐘）は何なですか？

—これはそれ（吊るす鐘）の前や。

ありがとうございます。小林さんお願いします。

竿計り

—これは竿計りというて、子どもは釣竿で書いてるけ

ど。これは分銅がないで（使えない）この思い出は学校あがって、山仕事。冬季に炭焼き、親父さんがいやって炭焼きを覚えてもらって、炭は4貫目、ちょうどこれで計ってた。

4貫目って何キロ？

—15キロ。炭は4貫目やったな。

炭焼きの炭を計るのに使った？

—炭を俵に入れて。

どちらかというて、農業より炭とか山仕事のものなんですか？

—炭小屋で炭焼いて。「売ってくれ」って買いにきはったわ。もっとこれより大きい20貫とか計るのもあって、米とか計るのに使う。60キロ。これは4貫目の計りです。懐かしい。

ありがとうございます。大きいやつっていうのは棒がもっと太いんですか？太くて長い？

—米計るやつやったら、もっと太い。長さも1メートル2・30ある。それで二人で担いで米ひっかけて計ってた。

—重りをつけて真っすぐになったらいいの。分銅を移動して目方がどれぐらい変わるか計る。まだ最近まで使ってたで。

これでここ（竿の部分）が目盛なんですよ？

—百貫法やでな。

生活のなかで頭使てはるね。

—分銅の重さプラス目盛やな。

—米計るのは竿の太さが3cmほどあって、長さが1

m2・30cmの上あったわ。分銅はこれくらい（高さ20cm程）あったわ。そうでないと計れやんだ。それを二人が担いでた。

—この計り見てたら思い出すわ。伊勢から魚屋が（来てたこと）

行商ね。

—目盛を動かすけど、こうしてた（手で調整して得するようにしてた）。こうやって商売してたんやと思うわ。

—まけてもらうときは、竿をちょっとあげてくれんねん。「まけたるわ」言うて。

電子計算機

—電子計算機と書いてあるけど、電気でも電子でもない、手回しの計算機ですわ。仕事で使ってたさかいに、入ってきたときに目についたのがこの計算機です。

—手で回して数字を合わせんねん。

最近、昭和40年頃まで使ってたよな。

—電気の計算機が出来るまでこれを使ってた。計算機でも、前の線が震てるような数字がいくつも書いてあるような計算機が最初にでてきた。それまではこれを使ってた。今の計算機になる前やな。これを手で回して。これが早かったわけやねん。かける数字と掛けられる数字を入れて、答えがここにでる。

—十何回掛けようとおもうと、一つ桁をおくるわけ。こうして使った。

わりとこれは進んだやつですね。もっと単純なものもある。

—これよりもう一つ前に使ってたんが、タイガーの計算機。

50年くらい前ですね。使ってたのは。ぼくらが大学のときに研究で使ってた。

—山の上まで持って上がるんやけど、重たて持てへん。

山内にあった屋号と店

山下薬局—くすり

木下屋—肉屋

彦武—布・反物

橋本屋—魚、野菜

千松屋—魚

紺定—料理屋

油屋—雑貨

栄屋—雑貨

ひだち屋—居酒屋

おきとうどん—うどん屋

菓子幸—生菓子、駄菓子

鍛冶屋

自転車屋

豆腐屋

材木屋

煙草屋

山内エコクラブ 通信

平成21年10月1日

第2回 いよいよ川づくりワークショップ

山内の里山文化、水文化を発信してきたよ!

なんと 準グランプリ・森清和賞ダブル受賞

【第2回いよいよ川づくりワークショップに参加】

9月21日、22日と東京 国立オリンピック記念青少年総合センターにて、全国計50団体によるいよいよ川づくりの公開選考会があり、山内小学校5年エコクラブ(井阪校長先生プロデュース)代表3名が山内川と水文化について発表してきました。3分間の限られた時間に、一次審査は、校歌と山内の水と暮らしについての報告をし、発表後も審査員からのいくつかの質問に答え、思いもがけず選考17団体に残ることができました。二次審査も3分規定で、自慢の鈴鹿馬子唄と水文化を寸劇で披露、会場からの大拍手、国からの官僚さんや学者さんまでが、3人のチームワークと巧みな(?)演技に圧倒されての受賞でした。(準グランプリは4席)【歌うように水の伝統文化の宝を伝える感動的演技で賞】と賞の命名までいただきました。格段にレベルの高い他の団体の発表や、審査員・コメンテーターの先生から川を大切にしたいと聞き渡す活動、熱い思いを聞きたくさんの勉強をして帰ってきました。

号外

お鏡調査

7月に5年生が、手わけをし、山内学区の約100件の家にお正月にお鏡を備える場所を聞き取り調査しました

花笠踊り

昔の暮らしを知っているお年寄りの方に話を聞きました。山内に伝わる『花笠おどり』が、雨乞いのまつりだということがわかりました。昔は山の頂上で踊ったのが、今は神社の祭りになっているようです。



パネルでピーアール



林さんに昔の暮らしを聞く



たくさんの副賞をゲット!

アピールしてきたこと

- ① お鏡を供えるのは、生活の中で、大事にしている場所や物への行いです。井戸や水の神さん、田んぼの神さん、取り水のところにも供えていて水への感謝の気持ちが大きかったことがわかりました。
- ② 地域に伝わる『花笠踊り』が雨乞いの祭りということがわかりました。若者不足で縮小している地域があるということがわかりました。
- ③ 川や山水の取水口を大切にしている行事(お鏡を供えたり、花笠踊りに参加したり)に関わることで、地域の水文化が伝わっていくと思うので、行事への参加を呼びかけたい。

ご協力
ありがとうございました

これからも、昔から伝わる水の大切さ、山内の川の良さ、伝統文化を調べて伝えていきたいです。

文責 竜王 真紀

中 日 乗 局

(第3種郵便物認可)

地域の水と文化テーマに

山内エコクラブが 大型絵本作る



本番に向けて大型絵本の読み聞かせを練習する山内エコクラブの皆さん。甲賀市の山内公民館で

「鈴鹿物語」31日に読み聞かせ

甲賀市山内小学校の児童らでつくる「山内エコクラブ」(竜王真紀代表)が、地域の水と文化をテーマに大型絵本「鈴鹿物語」水をつなぐ山内の龍王」を製作した。三十一日に学校近くのタイヤモンド滋賀ホテルで読み聞かせをする。(宮川弘)

【甲賀】クラブは本年度から活動を始め、井戸水の調査や郷土家への聞き取りなどをと、昔から水とかわりながら、水を大切にしてきたこの地域を知ってもらおうと昨年、一月半かけて大人の手助けを借りながら絵本に仕立てた。

縦百二十枚、横九十枚で十一枚。表紙は鈴鹿馬子唄で、住民の信仰を集める水の神の龍王伝説や、きれいで魚がたっぷりの黒滝の清流、農工業に貢献している物を作り出す水の力などを挿絵などで紹介。水と生活のかかわりに詳しい同小の井阪尚司校長が監修した。

最後に「山内はいとろだなあ。この感動を未来につなごう」と、クラブ員六人が唱和して締めくくった。五年竜王みやびさん(こ)は「お年寄りから聞いた山内の良さをしっかりと伝えたい」と張り切る。コンサトは文化庁のつくる実行委員会などが主催。実行委員長の谷川重喜・同小同窓会長(こ)は「子どもたちに元気づけられた。夢を持って古里を語りたい」と誇らした。

午後一時半開演。同クラブの発表のほか、京都フィルハーモニー室内合奏団による演奏もある。無料。定員二百人。希望者は官製はがきで二十四日(必着)までに申し込む。問い合わせは、しが文化芸術学習支援センター(電話077-5255)・9995へ。



ヤッター！淡海エコクラブ大賞受賞 ちょっとびっくり？

2011年12月4日(日)に琵琶湖博物館で県内の子どもエコクラブ交流会がありました。わがエコクラブは、2年前のジャンボ絵本で大賞を受賞して以来の2回目の参加となりました。小さな子ども達には、はじめてのコンクール的な発表会で、制限時間5分の間にプレゼンテーションをして、その後3分間の質問を受けるというものです。

今年とりくんだ昔の暮らし聞き取り調査の報告と寸劇、やまえこソングを出場した7人全員が、うまく発表できました。そして、他の素晴らしいエコクラブ活動（リサイクル活動、生態系観察、水質調査、森探検、天体観察など私たちが日ごろしていない理系的な活動）は、とても勉強になりました。

そんな中で、まさかの大賞受賞。奨励賞3席にも入るとは思っていなかったため、びっくりしました。子ども達のがんばりと協力してくださった高齢者の皆様に感謝ですね。

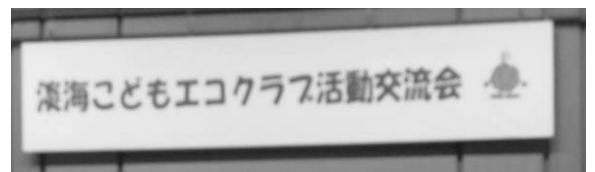
嘉田知事からいただいた受賞の重みを感じ、でも気楽に・・・がんばりましょう。おつかれさまでした。

★ 発表内容

今年6月～9月までに、山内地区の4名のお年寄りの方に聞き取った水と暮らしの調査を発表しました。調査の結果わかったこととして、

- ① 水道がない時代、井戸水を大切に使っていた
- ② 井戸の水を汲むのは、子どもの仕事であった。
- ③ 水を瓶に入れておき、そこから生活に必要な水を分けた
- ④ 風呂は、3日に1度くらいで、3軒くらいが交代でもらい風呂をした家もある。
- ⑤ 電球は、家に1つか2つだから、夜は家族が同じ部屋に集まって団欒をした。
- ⑥ うさぎ、家での鶏も食べた。
- ⑦ みんなで、助け合ってモノも分け合った。

→以上を寸劇を交えながら、発表しました。そして、やまえこソングを久々に歌いましたね。





嘉田知事から「大震災を目の当たりにして、水や電気がなくなったらどうするか、を高齢者から聞き取り、今自分達ができることを考えようとしている。」また、他の選考委員からも「違った目線からの山内エコクラブの活動が楽しみです」と、講評を頂きました。聞き取りから自分達は何ができるかの話し合い、アクション化していく必要がありますね。

協力いただいた4名の方々・・・ありがとうございました。



高齢者のお顔は
優しいですよ。

6月12日 黒川 元一さん宅(笹路区)



7月24日 岡田正男さん宅(上の平区)



つるべ式のくみ上げ井戸
水の重たさと冷たさを感じまし

8月22日 北林 良三さん宅(山女原区)



9月11日 馬場 武郎さん宅(市場区)



自分達が聞き取った内容発表や質問をします。

御礼をこめて、自慢の馬子唄を披露します。

あなたも仲間 夢と感動と潤いを届ける 山内エコクラブ

やまえこ通信：<http://2014.yamaeco.net/yamaekotuuusiin23.html>

ホームページには子どもたちと取り組んだ 以前のやまえこ通信が掲載しています。

資料 平成 23 年度 山内自治振興会 地域福祉部 名人発掘事業

■なぜ今名人発掘か(問題提起)

中山間部では、少子高齢化に悩みながら、地域が元気になれる(地域活性の)動きが始まっている。さて、地域活性を進める上で、「地元の間人がどれだけ地域に愛着があるか」は大切な要素である。私たちは、山内の良いところをいくつ挙げられるだろう。案外知らない、山内の良さ。緑あふれる四季折々の自然、歴史、文化・・・そして忘れてはならないのが、人の知恵などの地域資源。見渡しただけでも、特技や知恵を持った人が多くいることに着目し、山内レベルでの“名人”と名づけ、地域の人財の掘り起こしをしようとした。特に今回は、知恵の宝庫である高齢者世代を中心に聞き取りし、高齢者が活躍できる場所や機会の仕組みづくり・高齢者を受け入れるまちづくりのステップとして、名人発掘をすることとなった。

■山内名人発掘事業のめざすもの

発掘することが目標なのではなく、発掘された人財を磨き、地域の魅力を高め、山内の「誇り」を具体化し、地域内だけでなく、地域外からも認められるように取り組んでいくこと、つまり価値ある「山内ブランドづくり」をめざした。

■山内の自然環境と集落

山内は、滋賀県の東南隅、甲賀市の東端にある山間の地区、琵琶湖に注ぐ野洲川の源流地域である。東南は鈴鹿山脈の稜線を境にして、三重県亀山市に接し、東海道 49 番目と 48 番目の宿場町である土山宿と坂下（三重県亀山市関町）宿の中間にあったことから、宿場として経済的にも文化的にも三重県との交流が盛んであったといわれる。しかし、宿場の境であった鈴鹿峠の地勢は険しく箱根につぐ難所として知られていた。また、東海道を往来する人々が、この地域の天候の変化を「坂は照る照る鈴鹿は曇る あいの土山雨が降る」と唄った鈴鹿馬子唄は有名である。国指定の大日如来坐像、県指定の花笠太鼓踊り(山女原・黒川・黒滝)、登録有形文化財の火頭古神社本殿があり、民意伝承できる人がいてくれる。

山内地区は、人口 1046 人、323 世帯、25~45 戸の世帯からなる 9 つの集落で成り立っている。鈴鹿峠へ続く豊かな里山に囲まれており、地区の中心には 琵琶湖に注ぐ野洲川の上流、田村川が流れている。こうした里山や水辺環境は、集落を基本とした山内の人に保全保護され、そこでとれる米や農作物などの恵み、山々の木から、工芸品や郷土料理など豊かな山内の生活文化が形成されている。



平成23年度の取り組み報告

【山内の「誇り」である人財の分野わけ】人財を次の5つに分野わけした。

①生業	農業・林業、水産業、生産活動全般
②文化・芸術・	木工、歴史、芸術的な趣味、音楽的なもの
③生活・活動	趣味、くらし、食事、手芸、生活上の知恵
④祭事	氏子の祭り
⑤自然・環境	川、山、環境保全

【名人の聞き取り調査の体制づくり】

■部会の班員：山内自治振興会運営委員の中で、福祉や教育に関わった経験がある人や資源の掘り起こしに関心のある人と振興会の幹部の他有志、アドバイザーの金井萬造氏（立命館大学教授）で構成された。

【実施方法】

■発掘の方法として、メンバーだけの意見では偏りのある選出になることを避けるために、2段階方式で聞き取り調査を行った。

1段階目：9つの地区（字）から有識者を選出し、有識者より地区にすむ名人の名前を聞き取る（7月）

2段階目：有識者より選出された名人さんに聞き取りを行う（9月～12月）

■経過

日時	班会議	内容
6/8	第1回 班会議	名人発掘事業の目的、目標の確認
7/13	第2回 班会議	調査の体制、すすめ方について (聞き取り項目、注意すべきところ確認)
7月～8月	有識者への聞き取り調査	班員3, 4名で有識者への聞き取りの模擬を実際に行ったあと、9つの地区の有識者への聞き取り調査
9/5	第3回 班会議	有識者から聞いた名人さんのリストアップ マップにジャンル別に色分けして、プロットした「山内の名人さん」の特徴を意見交換
9月～12月	名人さんへの聞き取り調査	名人さんへの聞き取り(班員が1～2人のペアで)
10/24	女性運営委員との合同会議	女性の視点から見た、山内の名人発掘について意見交換
11/25	第4回 班会議	リストアップされた名人さん確認と聞き取り調査から学んだことについての意見交換、今後の展開

3/24	第5回 班会議	成果物（ファイリング、ちらし）確認、事業評価
------	---------	------------------------

班会議の前後には、打ち合わせ会議を行った。(8回)

■聞き取り調査項目

	1段階目 有識者への聞き取り調査()名	2段階目 名人さんへの聞き取り調査(33名)
手順	事業目的、事業の効果、事業の展開を説明し、事前にお願ひし文書を手渡す	事業目的、事業の効果、事業の展開を説明、有識者からの推薦があったことを伝え、協力を依頼する。
聞き取り内容	字内の特技や技術を持った人の推薦 名人の内容、氏名	得意の知識、技術、知恵の聞き取り ・具体的に聞く・作品を見せていただく・写真撮影・エピソード
注意したこと	字の人脈を聞き、名人さんへの配慮など 有識者さんへの敬意	個人情報や作品を撮影することの許可 名人さんへの敬意

■字別分野別分類

	生業	文化・ 工芸・芸術	料理・ くらし	祭事	自然・ 環境・山	地区、名人さんの特徴
黒滝					●	山の案内人
上の平		●	●	●	●	農耕、化石、料理、民意伝承
中の組	●	●		●		川、カメラマン、祭事の伝承
黒川市場		●		●		木工、祭事の伝承、手芸
川西		●		●		祭事の伝承、手工芸、
猪鼻		●	●	●	●	東海道・歴史の伝承、川、自然
山中		●	●		●	東海道・歴史の伝承、カメラマン、山の案内人
笹路	●					山の案内人
山女原		●	●	●		木工、手工芸、祭事の伝承

【地図にプロット(落とし込み)して見つかったこと】

地図にプロットして、客観的に山内に住む人財について意見交換した。

- ・山内には、文化・歴史的な人が多い
- ・何でも自分たちで作ろうとしている(家庭料理や工芸)
- ・9つの地域で平均に名人がいて、地域を案内してくれる人がいる

【名人聞き取り調査をして得られたこと・メンバーの意見】

- ・知らなかった山内を教えていただいた。
- ・地域の方と自治振興会メンバーがコミュニケーションを取れて、振興会事業についての声を聞いた
- ・教えてくださる名人さんの顔が輝いていることに気付いたし、改めて敬意を持った
- ・山内を見直した
- ・名人さんの持てる技や技能、知恵を生かしたいと思った
- ・集落間のことを分かり合えた
- ・聞き取りが楽しかった

【平成23年度の成果】

地元住民は、自分達のすむところを否定的に捉えてしまい、そこで口にする「なにもないところ」。

しかし、今回の名人発掘事業を通じて、山内にはいろいろな生活の知恵や技術、豊かな自然や、云われ、多様な生活文化などを教えてくれる人財（宝もの）があることを知った

例えば、川原のヨシで作るヨシちまきについて聞いたところ、昔の野上り(田植えが終わり一段落したときに作って、神さんにお供えし、豊作を祈る)の時期にしたものや」と60年以上前のことを話してくださいました。また、花笠太鼓祭りについても、豊作を祈る雨ごいの祭りであったこと、山の話を知ったら、昔交流があった三重県の話、もともとは林業が盛んで木工をされていることなど、暮らしと生業の深いかわりを知ることができた。そして、このあたりまえの営みと歴史が、マップ化したり、瓦版、ファイリングなど可視化することで、地域の独自性が浮き彫りになりました。自分たちで、やったことをまとめることは、地域の資源を見つめなおし、価値を発見するための目線の開発にもつながったと思われまます。そして、これが新しい山内の街づくりの基盤になると考える

山内のような高齢化が進む中山間地帯はこどもの教育問題、医療の確保、就労先など大変である。でもここには豊かな自然のほか、人財とあることに気付いた。発掘だけでは意味がないことは初めに確認したが、どのようにこの資源を活かし、価値としていくかが今後の課題となる。待っていることを美德としている価値観の見直しを図り、地域ならではの(自然・産業・産物・歴史・文化・食事・祭事・伝えてくれる人財)、他のところにはないレベルと価値を生み出し、精神的な効果のとどまらず経済的な効果も生み出せるよう、次年度以降の展開を考えたいと思う。

【総評】

名人発掘事業 アドバイザーよりコメント 立命館大学 経済学部教授 金井萬造
名人発掘事業に参加してのコメントは次の5点である

- ① 山内は交通の立地条件や自然に恵まれているが、豊かな人財の資源を発掘して地域再生をめざす大きな力を持っている
- ② 人財資源は豊かで、自然環境を生かした生業・生活・活動面や文化・工芸の創造面で可能性が大きいことが判明した。これらをどう具体的に生かすかが課題である。
- ③ 人財による地域再生と共に次世代への継承の取り組みが自治振興会の課題として提起された。
- ④ 名人さん個人の保有する価値を地域の経済・生活・活動の豊かさ再生に貢献していく具体的な取り組みが事業化の課題となっている。
- ⑤ 人財資源とその他の地域資源を結合した総合化によって山内地区事業として始動されることを期待したい。



名人発掘事業班 吉田権栄門、馬場重夫、平子忠擴、谷川重喜、中嶋貴一郎、
黒川昌明、林口富雄、竜王みゆき、
服部喜久典、北岡勇一、他 有志者

(文責・班長)竜王 真紀

資料 山内の太鼓祭り〔黒川・黒滝・山女原〕

中河仁志さん〔兵庫県立大学〕現地レポートより

土山の太鼓踊り [\(と3地区の祭りの違い\)について](#)

土山町の黒川・黒滝・山女原の3地区には、「太鼓踊り」や「花笠踊り」と呼ばれる風流踊りが毎年神社の祭礼に奉納されている。[黒川・山女原・黒滝で傳承されている花笠太鼓踊りが「土山の太鼓踊り」として平成8年3月に県指定の無形民俗文化財として選択されている。\(しがぎん健康友の会、1996、P. 51\)](#)

土山の太鼓踊りは、どの踊りを見ても衣装や小道具は少しずつ異なっているが、踊り自体の形式や歌詞などが良く似ている。

この踊りの起源は、この地区が農林山村であることから、農作業の安全や豊作の祈願が由来になっていること

が容易に想像できる。特に、水稻農業においては水がなければ成り立たないことから、早魃の際の雨乞い踊りが始まりであるといわれている。

近畿地方で、雨乞い踊りに「風流」が行われた文献上の初見は『政基公旅引付』亀元年（1501）の条である。京都の殿上貴族九条政基⁽²⁾は、このとき和泉国日根庄にいたが、その郷民が盂蘭盆会の七月十五日、雨乞いの立願も込めて「風流」を演じた。その願いが叶ったこともあり、八月十三日には「風流」を盛大に演じている。

この時期の「風流」は、まだ一種の囃し物であり、まだ踊りという芸能には発展していなかったと考えられるが、雨乞いに郷民総出で「風流」という芸能を演じるという形態が、すでにこの頃にはできていたのである。

「風流」の「踊り」を雨乞いに演じた文献上の初見は、奈良県天理市の布留神社（石上神社）のもので布留川の上流に位置するこの古社は、布留川の水利を共有する郷村（布留郷と呼ぶ）四十数ヶ村の信仰が厚かったが、特に雨乞いには、これらの郷民によって盛んに風流が踊られている。『多聞院日記』天文十九年（1550）七月二十日条に「祈雨立願之躍南里分在之」とあるなどがそれである。

土山町の太鼓踊りがいつ頃から行われていたかを証明する資料はない。しかし、伝承された芸能の原型は、室町時代末期から近世初期に伝播した「風流」踊りであることは間違いがない。ただし今日見るような太鼓踊りの姿が、そのまま当時のものであったかどうかは不明である。

土山町にある太鼓踊りに関する年号のある史料で最も古いのは、黒川の川西集落に残る太鼓の胴の銘分で、安永二年六月に愛知郡永塚村（現在の秦荘町）の太鼓屋藤七が製作、文政十三年（1830）に今度は土山町水付の太鼓屋長右衛門が修理、明治六年には伊勢鈴鹿の太鼓屋で皮の張替えを行っている。（土山教育委員会事務局社会教育課、1987、P. 5-6）

土山の太鼓踊りの特徴は、「側踊り」の形態が残っているところである。「側踊り」とは鬼面を付けた棒振りと花笠姿の太鼓打ちの形成する「中踊り」の周囲をとりかこむ歌役の者たちである。黒川地区では黒い着物・白足袋・草履ばきの姿で、花笠を被り、扇を持っている。特に山女原地区では「側踊り」が色濃く残っている。黒川地区や黒滝地区ではすでになくなりかけているが、その残存を認めることは可能である。他の「順役踊り」系の「風流踊り」を伝承している地域でも「側踊り」を残しているところは大変珍しい。その点で、土山の太鼓踊り、特に山女原の伝承は大変貴重である。さらに、この地域の特色は「順役踊り」である。この踊りは、踊り方が難しく、習得が困難なこともあり、やめてしまっているところが多い。確かに、「順役踊り」は、踊り方が難しく、時間的にも長いですが、やはり変化があつておもしろいのは「順役踊り」であり、この踊りを伝承しているかないかで、伝承の意義に大きな違いがあるだろう。（土山教育委員会事務局社会教育課、1987、P. 6-7）

山女原の太鼓踊りについて

図-4 山女原の太鼓踊り



出所：ホームページ (<http://www.photoland-aris.com/myanmar/ne/9/>) より転載

山女原地区は、田村川の支流である笹路川の最上流部に位置し、三重県との県境近くに開けた集落である。集落の北方に位置する上林神社を氏神とし、古くは旧暦の6月14日の祇園祭りに太鼓踊りが行われていたが、大正11年頃より、現在のように4月15日の祭礼時に踊りが奉納されるようになった。祭礼については、もともとは、家の町となる学校を出て42歳までの男によって構成される「山女原倶楽部」が中心となっていたが、現在では倶楽部の人数が減少し手織り、地区をあげて運営にあたっている。祭りの踊り子は、「太鼓打ち」2人、「棒振り（メン）」~~2~~人、「ほら貝」2人、「歌出し」2人で、「ガワ」は1戸に一人ずつ参加する。太鼓打ちは30歳前後の者がつとめ、棒振りは小学生の子供、ほら貝と歌出しは青年の役で、それ以外の人はガワをつとめる。

4月に入ると地区の公民館や茶工場で踊りの練習が始まり、4月12日の夜に「ならし」として練習の総仕上げをおこなう。また、祭日に近い日曜日には、地区の人が総出で神社や寺の掃除、午後からは「笠張り」として花笠や棒・軍配などの踊りの道具の準備が行なわれる。

山女原では、川を挟んで「向出組・東出組」と「下出組・丸田組」に別れて踊り宿を決めているが、祭日前夜の宵宮では、太鼓打ち役の家が踊り子の宿になり、午後8時頃から行列を作り神社へと向かう。それぞれの組が神社の鳥居の前で落ち合うと「出会い出会い」という出会いの儀式があり、その後境内で2時間程度踊りを奉納する。当日と比べ衣装も略式で、練習の仕上げのような雰囲気である。祭礼当日は、踊り子たちは支度を整えてそれぞれの踊り宿に集合し、ホラ貝の合図で本踊りの開始を知らせ、午後3時ごろ、一行は列を組んで上林神社へと向かう。宵宮と同様に、神社の前で出会いの儀式を行い、境内での踊りに臨む。最初に「式入り」を踊り、「場ならし」「神楽踊り」「里の踊り」「宝踊り」と続き、最後に棒振りが加わり「津島踊り」が踊られ神社での行事が終了する。その後、一行は再び列を組みなおして地福寺へと向かい、お寺で「式入り」「場ならし」と「お寺踊り」を奉納して、午後五時ごろ、全ての行事は終了する。山女原の太鼓踊りの特徴は「側踊り」で、「中踊り（太鼓打ち・棒振り）」を中心に「側踊り」が周りを取り巻き、踊るといふ風流踊りの本来の姿が色濃く残っている点である。

現在は、地区に残る小学生はおらず、踊り子を務めるものがないため奉納のための踊りを休止している。伝

統を正確に受け継いできた地区であり、神事として完璧に行なうことができないため、子供の代わりに大人が踊り子をつとめるなど無理をして踊りを続けることはしていない。

黒滝の太鼓踊り

黒滝の太鼓踊り

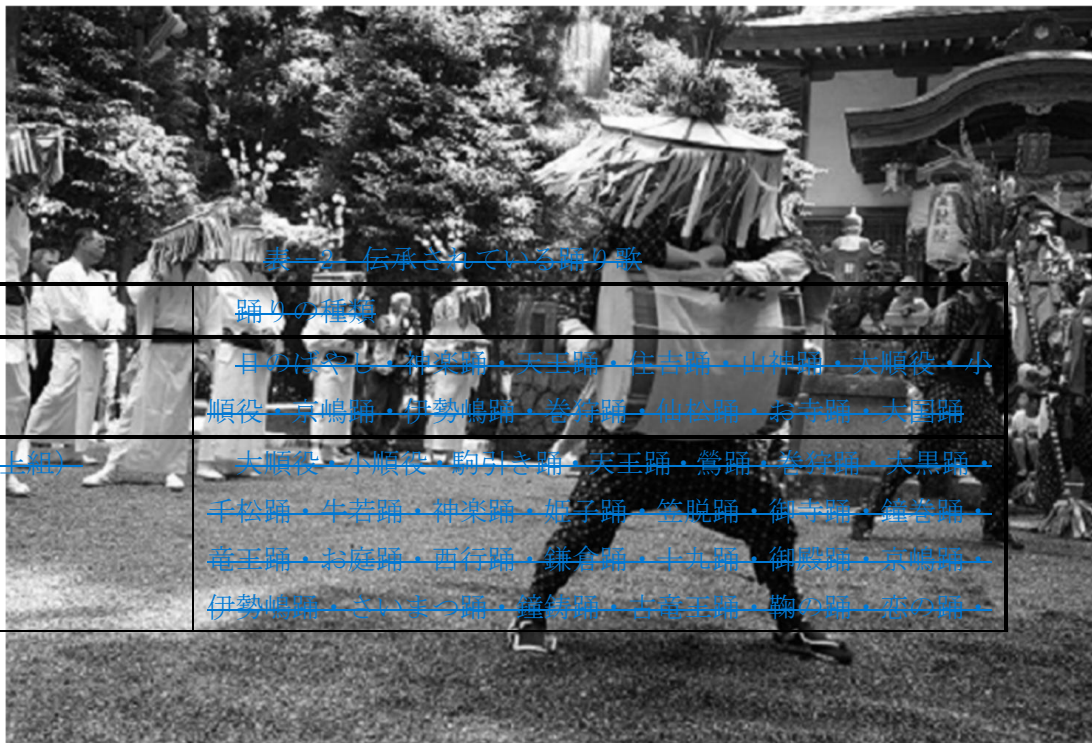


表-2 伝承されている踊り歌

地区名	踊りの種類
黒滝	目のはやし・神楽踊・天王踊・住吉踊・山神踊・大順役・小順役・京嶋踊・伊勢嶋踊・巻狩踊・仙松踊・お寺踊・大団踊
黒川(上組)	大順役・小順役・駒引き踊・天王踊・鶯踊・巻狩踊・大黒踊・千松踊・牛若踊・神楽踊・姫子踊・笠脱踊・御寺踊・鐘巻踊・竜王踊・お庭踊・西行踊・鎌倉踊・十九踊・御殿踊・京嶋踊・伊勢嶋踊・さいまづ踊・鐘巻踊・古意王踊・鞠の踊・忍の踊

出所：ホームページ山車とまつり より転載

黒滝地区は、黒川地区北東、田村川のさらに上流に位置する谷間にひらけた集落で、地区の東南に位置する惣王神社を氏神とし、7月11日の祭礼に太鼓踊りが奉納される。太鼓踊りの構成は、「太鼓打ち」2人、「棒振り（メン）」2人、「ホラ貝」2人、「歌出し」2人、各戸一人からの「ガワ」で、これらの人々は、黒滝に住む18歳から40歳の男性で構成されている。役の順番は、棒振りをつとめたあと太鼓打ちを2～3年受け持ち、その後ホラ貝、歌出しをつとめて卒業となる。踊りの練習は、6月の下旬頃より始められ、7月9日の「打ちじまい」で仕上げをする。黒滝地区は、奥・中・口の三つの集落に分かれており、それぞれ回り番で当番の家を決めている。祭日に近い日曜日には、その当番の家に各家の男性が集まり、「笠張り」として花笠や軍配、棒など踊りの道具を準備する。祭日前夜は宵宮がおこなわれ、踊り子や地区の人々は神社に集まり、午後8時頃より踊りが始まる。

	日の祭り
黒川（下組）	大順役・小順役・大黒踊・神楽踊・馬場入り・竜王踊・天王踊・鐘巻踊・御鷹踊・御寺踊・御殿踊・中納言踊・鴨狩踊
山女原	お蔵踊・神楽踊・里の踊・宝踊・大順役・小順役・津島踊・お寺踊・山伏踊・鐘巻踊・姫子踊・御殿踊・花見踊・お鷹踊・姫の踊・伏見踊・さいとり踊
青土	中踊・屋形踊・大じんがく踊・小じんがく踊・御船踊・御寺踊・大里踊・御殿踊

衣装や道具は練習時のものを使用し、総仕上げという雰囲気、1時間程度で終了する。

当日、ホラ貝を合図に、衣装を

付けた踊り子

たちや役員は

区長宅に集合し、午後10時頃から区長宅で「大黒踊り」を踊る。その後、一行は列を作り神社へと向かう。踊り子たちは鳥居前で列を整えなおすと、「振込み」で境内に踊りこみ、「日ばやし」を踊ります。続いて「神楽踊り」「天王踊り」「住吉踊り」「山神踊り」を踊る。休憩の後、「大順役」「巻狩踊り」を踊り神社での行事を終える。その後、列を整えてすぐに瑞雲寺へ向かう。お寺に到着した一行は、「振込み」で境内に乗り込み、「日ばやし」「お寺踊り」「千松踊り」を続けて踊り、全ての行事は終了する。（以上、土山教育委員会事務局社会教育課、P.15-27）

表-2 伝承されている踊り歌

地区名	踊りの種類
黒滝	日のばやし・神楽踊・天王踊・住吉踊・山神踊・大順役・小順役・京嶋踊・伊勢嶋踊・巻狩踊・仙松踊・お寺踊・大黒踊
黒川（上組）	大順役・小順役・駒引き踊・天王踊・鶯踊・巻狩踊・大黒踊・千松踊・牛若踊・神楽踊・姫子踊・笠脱踊・御寺踊・鐘巻踊・竜王踊・お庭踊・西行踊・鎌倉踊・十九踊・御殿踊・京嶋踊・伊勢嶋踊・さいまつ踊・鐘巻踊・古竜王踊・鞠踊・日の祭り
黒川（下組）	小順役・大黒踊・神楽踊・馬場入り・竜王踊・天王踊・御鷹踊・御寺踊・御殿踊・中納言踊・鴨狩踊
山女原	お蔵踊・神楽踊・里の踊・宝踊・大順役・小順役・津島踊・お寺踊・山伏踊・鐘巻踊・姫子踊・御殿踊・花見踊・お鷹踊・姫の踊・伏見踊・さいとり踊
青土	中踊・屋形踊・大じんがく踊・小じんがく踊・御船踊・御寺踊・大里踊・御殿踊

川の太鼓踊

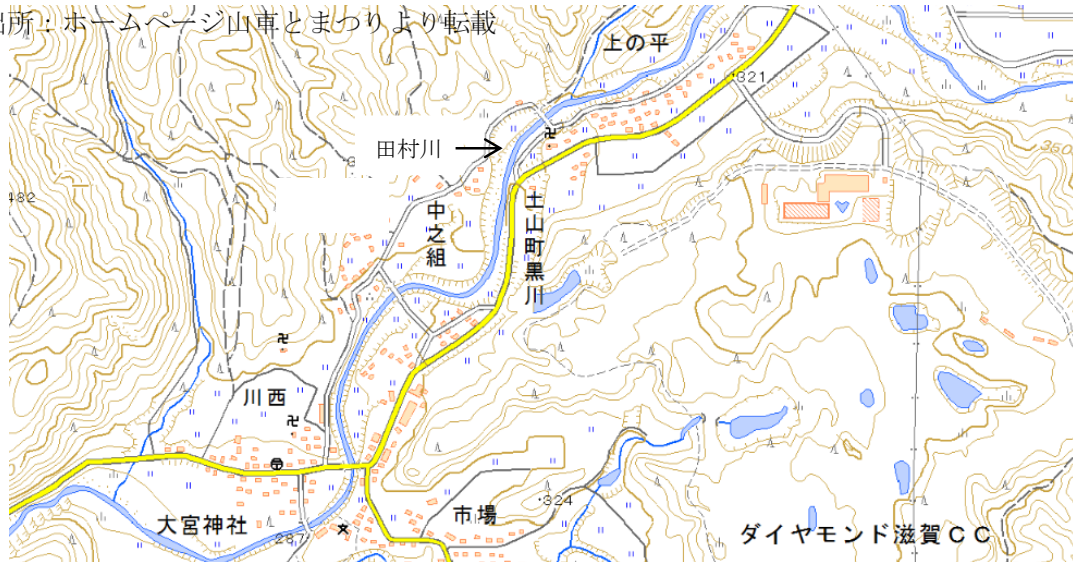
出所：土山の太鼓踊り（1987）より筆者作成 *現在歌われていない歌も含まれている

黒川の太鼓踊りの歴史と祭り行程の概要

黒川の太鼓踊り



出所：ホームページ山草とまわりより転載



出所：国土地理院ホームページ 地理院地図（電子国土 Web）より転載

土山町の東部、旧山内村には現在三か所に太鼓祭りが伝承されている。その内、黒川の**花笠**太鼓踊りは、4月15日に毎年大宮神社でおどりが奉納される。

黒川地区には、野洲川の支流、田村川の上流沿いに四つの集落が点在している。(図-3-5) それらは、上流から上ノ平・中ノ組・市場・川西の四集落である。また、上ノ平・中ノ組を合わせて「上の垣外(上組)」、市場・川西を合わせて「下の垣外(下組)」と呼ばれている。大宮神社の祭礼に演じられる太鼓踊りはこれら四つの集落が個別に分担するが、中心の祭場である大宮神社では上組・下組の二つの組が、それぞれ踊りを奉納する。また二つの組が合同で演じる曲もある。

図-3 甲賀市土山町黒川地区の地図



しかし、古くは黒川村には神社が三か所あり、大宮神社は下組(市場・川西)の氏神であり、上ノ平は若宮八王子神社、中ノ組は田村神社と言うようにそれぞれ別の神社があった。明治の神社合祀により、これらの神社が大宮神社に合祀されたため、踊りも大宮神社の祭礼に集まって行われるように

出所：国土地理院ホームページ 地理院地図(電子国土地図)より転載

なったようだ。同じ村内の踊りであるにも関わらず、上組の踊りと下組の踊りでは歌われる歌に大きな違いがあることも、もともと別の神社に奉納していたものであるとしたら、納得のいくものである。

黒川で継承されている踊りは現在では「太鼓踊り」、または「花笠踊り」と呼ばれているが、古くは「小踊り」と呼ばれていたらしく、慶応三年ノ踊りの歌本などでは「小踊り」の名称が記されている。(土山教育委員会事務局社会教育課、1987、P.8) なお、本論文では、この祭りを「太鼓踊り」と呼ぶことにする。

祭りの踊り子は、上ノ平・中ノ組・市場・川西の各集落の氏子青年会に所属している青年たち (以下、3-2㊦

で詳述）がつとめる。各集落の氏子青年会からは、「太鼓打ち」1人、「棒振り（ボウと呼ぶ）」1人、「貝吹き」1人、「歌だし」2人、「踊り警護」2人、「役員警護」2人の計9人が出て役をつとめる。その他に、青年会以外から「ガワ」と呼ばれる歌役の者が15人程度参加する。

踊りの稽古は、4月5日（古くは4月3日）の「打ち始め」から始まる。場所は、各集落の公民館で行われる。現在では、公民館が祭礼行事の拠点として使用されているが、本来は毎年交換で受け持つ踊り宿があったようである。稽古は4月13日の「打ち上げ」まで毎日公民館で行われる。また、4月11日には、「笠張り」として集落全戸から人が出て（一軒から一人ずつ程度）太鼓踊りで使用する花笠（花笠の紙・紙製の花は毎年新しく作りかえられる）や用具の製作が行われる。昔は雨で仕事ができない日を利用して、男ばかりで張ったそう。祭礼前日は一切踊らず、次の日に備える。4月15日の祭礼当日は、青年など祭り関係者一同は、8時ごろまでには各集落の公民館に集合し、出発前の祝宴を行い、その後衣装を着付けてなどの準備に取りかかる。

祭り当日の流れとしては、9時頃、太鼓踊りの本役の者たちと、その他、太鼓役・貝吹き・棒振りの各役一人を加えて、公民館の前で踊りが演じられる。本来この踊りは、踊り宿（その後、区长宅で行われた時期があった）の前で踊られるべきものである。曲も「お庭踊り」であったが、現在では「大黒踊り」（はじめに「馬場入り」が踊られる）が踊られている。なお、現在でも出発前の踊りの際「立ち酒」と呼ばれるお酒が振舞われるが、これも踊り宿を出発する際の儀式を継承されたものである。

公民館で踊り終わった後、一行は神社に向けて出発する。上組は、田村川左岸をしばらく下って平子橋のたもとで、右岸側の集落である中ノ組の踊りの一行と打ち合わせの時間に従って、落ち合う（「出会い」とよばれる）。なお、中ノ組でも出発前に「大黒踊り」を踊って、出発するのだが、古くは「鶯踊り」であった。ようである。平子橋で出会った両集落は、まず量組みの警護役がお互いに挨拶を交わし、次に羽織・袴姿の区長が挨拶をする。次に、棒振りが互いに踊りつつ近づき、次に太鼓役を先頭に貝吹き・ガワ踊りが後ろにしたがって近づき挨拶をする。このとき、太鼓を打ち、ホラ貝を吹くが歌を歌うことはない。

この「出会い」によって、上組の踊り組みがそろったが、下組の市場・川西の集落においても、ほぼ同じ時間に、同様の行事を行っている。下組の市場・川西は上組と下組の出会いが行われる青木ヶ瀬橋で「出会い」の儀式が行われる。現在では、下組の2集落でも出発前に「大黒踊り」が踊られているが、古くは出発前の踊りは踊られていなかったようだ。

上組と下組みはそれぞれ「出会い」を行った後、午前10時ごろ、平子橋からさらに田村川を下った青木ヶ瀬橋の左岸のたもとで上組と下組の「出会い」が行われる。「出会い」の儀式自体はどの場合も同じである。踊り組同士は、自分の地区の踊りを鼓舞しようとして喧嘩になることがあり、警護役はそれを押しとどめることが仕事である。

青木ヶ瀬橋では、まず青竹を持つ役人警護が「出会い」の挨拶が行わる。次に、区長など羽織衆がお互いに挨拶をする。次に、青竹と棒振りの軍配を手にした踊り警護が挨拶。次に棒振り同士が挨拶をする。この棒振り同士の挨拶が最も荒れ模様で、手にした棒で互いにぶつかり合うようなこともあり、付けている鬼の面が割れることもあったそう。このような場合、警護役が割って入る。次が、太鼓役の挨拶、さらに貝吹き、以下ガワの衆が挨拶を行う。

この「出会い」の儀式が終わると一行は青木ヶ瀬橋を渡り、大宮神社に向かう。大宮神社は川西集落に鎮座する黒川地区の氏神で、祭神は大国主命である。古くは八王子権現と呼ばれていた。すぐ近くには延慶3年（1310）の銘があることで知られている大日如来（重要文化財）を祀る大日堂がある。

青木ヶ瀬橋から神社へ向かう行列には、お稚児さんと呼ばれる、小学1～2年生の女子が5名、稚児姿になり、一行の先頭を歩く。この役は、各集落から一人ずつ出すが、その年の大総代（今の責任役員）のいる集落のみ二人を出す。その他に、浦安の舞の舞姫（中学生の女子）を各集落から一人ずつ、計4名が出て、神前で舞を舞う。

神社に踊り組の一行が到着すると、神社正面から、上組（上ノ平・中ノ組）が境内に練りこみ、上組の踊りが始まる。最初が、「日野祭り」その次に「神楽踊り」が踊られる。

上組の踊りが終わると、引き続き下組の踊りが踊られる。まず、「馬場入り」そして「神楽踊り」が踊られる。「神楽踊り」は、称は同じであるが、上組と下組では、振り付けも歌も異なったものである。これは、もともと上組と下組が別々の神社に踊りを奉納していたことが理由だと考えられる。また、下組の「神楽踊り」に付く「馬場入り」は、上組が「大黒踊り」の初めに踊るものとは違う独立した一曲である。

そして、「大順役」・「小順役」が踊られなくなってからは、最後に、上組・下組合同で「大黒踊り」を踊り、神社での行事を午前中ですべて終了している。しかし、本来この4集落（上組・下組）合同の踊りは神社での踊りが済んだあとに、黒川地区の大総代宅（古くは大庄屋宅か）で踊られていた踊りである。なお、この時の「大黒踊り」には「馬場入り」が付かない。

古くは、上組・下組の「神楽踊り」が終了すると神社で昼食をとり、午後からは、太鼓踊りのクライマックスともいえる「大順役」と「小順役」を、上組と下組とで一年交代で受け持ち踊っていた。さらに、大日堂や総代宅を踊りまわったそうだ。

こうして、4集落合同での行事がすべて終わると、踊り衆は各集落に帰り、さらに帰ってからもう一度、踊り宿（区長宅）でそれぞれ踊りが踊られた。上ノ平と中ノ組では同じ「笠脱踊り」が踊られた。川西では「馬場入り」と「笠脱踊り」、市場では「馬場入り」と「大黒踊り」が踊られた。（[以上](#)、土山教育委員会事務局社会教育課、1987、P.8-15）

山内の方言と言ひ回し〔甲賀郡史一部参照+アルファ〕

あがく：騒ぐこと	いなった：去る	いきなりに：突然に
あいさ：明日、間に	がっくり：落胆	いてかした：人と同行する
うたとい：めんどくさい	いかさる：行く	さいぜん：さきほど
あんばいよう：都合良い	かいく：全く	こそぶる〔こそばる〕：くすぐる
いかい：大きい	あかへん：無意味、ダメ	でのま：入口の間
けなるい：うらやましい	えらい：疲労	ほうよ、そやさ：共感の意味
ごくたれ：怠け者	いかはる：行かれる	ぼやく：怒る
しょうけ：米をいれる	きしなに：来る途中に	どしこいめ：ひどい目に
そやさかい：それゆえに	けちつける：凶兆	たいていやない：容易ではない
たもと：着物の袖	しぶとい：強情	どうど（ぞ）こど：標準程度
つくねもの：団子、餅	だんない：大事なし	ほったらかし：捨て置く
どつく：殴る、打つ	ちびたい：冷たい	せんどする：飽きる
ぴっと：少々	つまらん：心配、残念	ごうがわく：腹をたてる
ねね：幼児	のつけ：最初	ちんとする：礼儀正しくする
うたとい：面倒	ふげたが悪い：顔つきがわるい	ぎょうさん：たくさん
うんと：たくさん	ほる：投げる、捨てる	ようけ：たくさん
おもしろい人〔こと〕：楽しい人〔こと〕ではなく変わった人〔こと〕をさす		
やらしい人やな：卑猥な人、変な人		ござった：来られた
おとつつあん：お父さん	おなごし：女の人たち	おとこし：男の人たち
おかさん：お母さん	えらいこっちゃ：大変なことだ	ぬくとい：暖かい
てしょ：皿	たいがいや：ひどいものだ	
そ（ほ）やけど：そうだけど	しんきくさい：思うようにならずじれったい	
しまいめに：最後には	せわしない：せき立てられる（忙しい）感じがする	
なんぎやな：大変ですね	どないもこないもならん：八方塞がりな様子	
かまへん：構わない、結構です	～やさかいに：～だから	
～やん、～やんか：語尾につける		

資料 山内小学校ができるまで（山内小学校 同窓会誌“やまうち”より引用）

年	山中・猪鼻	黒川	黒滝	笹路	山女原
明治 6	進道学校 ができる		黒滝学校	文盛学校	山原学校
7	(常福寺・十 楽寺にあっ た)	載明学校が できる(川西)			
		しばらく 宝泉寺			
14	進道学校をやめて 載明学校と一緒に なる			不明	
15	山中学校が できる(社務 所)				
19			黒滝支校		
19	簡易科 山中小学校	黒川小学校 (猪鼻、黒川、笹路、山女原)			
			黒滝支校		
21	山中西尋常 小学校	山内北尋常小学校 (猪鼻、黒川、笹路、山女原)			
24	山内村立山中 尋常小学校				
			黒滝分教場		
25		山内尋常小学校			
34	山中分教場 (9月に廃止)	山内 尋常小学校	黒滝分教場 (1, 2年生)	笹山分教場 (1, 2年生)	
	山内村立山内尋常小学校 (分教場廃止)				
39					山女原分教場

続く

大正 2 年 山内村立尋常高等小学校
大正 4 年 山内村立尋常高等小学校 (実業補習学校併置)
昭和 1 0 年 山内村立尋常高等小学校 (青年学校併設)
昭和 1 6 年 山内村立国民学校
昭和 2 2 年 山内村立山内小学校
昭和 3 0 年 土山町立山内小学校
平成 1 6 年 1 0 月 甲賀市立山内小学校



山内小学校 校歌

作詞 馬場芳太郎 作曲 須川政太郎

—

鈴鹿の山を 見はるかす

ひろきを おのが 心にて

理想の天を 望みつつ

我等 稚木は 伸びて行く

二

山内川に のぞみては

清きを おのが 姿にて

日に新なる いそしみに

われら 撫子 咲き匂ふ

三

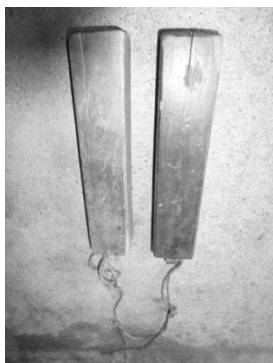
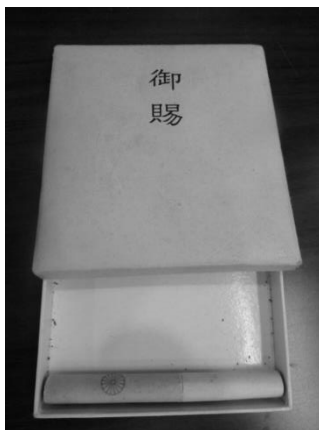
学の庭の わかきぐさ

やがて 世に立つ 花となり

実となるつとめ 怠らず

正しく 強く 生い立たん

資料 活動写真



S52,53 当時の山内小学校校長
(ふるさとやまうち 監修)の
若林憲秀先生と再会 (日野町在住)



資料 航空写真 昭和 23 年のふるさと黒川周辺

馬場正光さんより掛け軸の写真をお借りしました。

アメリカ軍による航空写真。



エコクラブ活動から山内ふるさと絵図作り展開へ

井阪尚司

滋賀県立大学の上田洋平先生の指導による心象絵図第1号は、2000年に完成した彦根市八坂地区のふるさと絵図です。あれから15年経った今年、県内には30番目の絵図が完成しました。「山内ふるさと絵図」は、来年の完成を目指しており、31番目～36番目の絵図になる予定です。中でも一度に6絵図ができるのは山内地域が初めてです。

「山内ふるさと絵図」づくりの種を撒いてくれたのは、6年前の山内地区の子どもたちでした。山内地域の昔の様子はどうかだろうと、お正月に供えるお鏡の調査を始めてくれたのです。そして、当時の山内公民館長と老人会長さんが、地図に昔の家や水車などの位置や様子を記録してくださいました。子どもたちが中心となって地域の宝もの探しをしようと活動を始めた山内エコクラブが設立され、山内地域の昔の様子を知る活動を継承していったのです。6年前の種が途切れ途切れしながらも発芽してカタチになったのは、山内エコクラブ会長を中心として取り組まれた「山内回想遺産」です。そして、この思いがさらに大きくなって今年、「山内ふるさと絵図づくり」がスタートしました。

地域の暮らし文化を次代に伝えたい、古老の記憶を見える化して絵屏風にしたい、地域外の人に山内の良さを知ってもらうツールにしたい。古老が語り部として活躍していただきたいなど、かつての心豊かな暮らしを地域の宝にしたいというみんなの思いが一つになっていきました。

「ふるさと絵図」は、地域のお年寄りに五感アンケートにより50～60年前の暮らしの様子を聞くところから始まります。さらに多くの人から何回も話を聞きいて、昔の地元の様子をイメージしていきます。そして、記録を元に四季の変化を加えて絵を描きます。完成後はお年寄りが語り部となって絵解きをされます。昔の様子を記録し、ふるさと絵図にしたい理由がいくつもあります。

①お年寄りが語り部となって絵解きをされるので、かつての地域の様子や豊かな経験を伝えることで、地域の文化を伝えるツールになる。

②井戸から水を汲み、水路から風呂の水を運んだ暮らし等を知り、五感を使って追体験できることから、「もったいない」の意味や循環について考えることができる。

③聞き手の子どもたちや若い世代の人たちとの交流が生まれる。また、学校での出前授業や滋賀を訪問した都会の人たちにとって滋賀の環境文化について学ぶ機会になる。

④絵図学習により、子どもたちや若い世代が、ふるさとを自分の言葉で語れるようになり、ふるさとへの自信と誇りと感謝の気持ちが育まれる。

⑤心象絵図は、回想法と呼ばれる手法の一つで、お年寄りの脳裏に刻まれた記憶を自らの力で再生することから、自身の生き甲斐にもつながる。

ふるさと絵図は、お年寄りの脳裏に刻まれている豊かな記憶を紐解き、モノ・コトの意味を次代に伝えるために見える化したもので、地域の誇りと文化を育む地域固有の記憶文化財です。この絵図づくりは、お年寄りが健在な今しか出来ません。

さらに、ふるさと絵図の取り組みは、文化、福祉、教育、暮らし、環境、生物、農林、観光、コミュニティなど幅広い分野と関わることから、国や県が進める ESD（持続可能な環境の教育の推進）につなげて、県内外や世界にも紹介していきたいと思っています。

地域の人によるもう一つの記憶遺産「ふるさと絵図」。夢をカタチに地域創生に活かしていきたいと思っています。乞うご期待。

おわりに

なんて、誇らしげなお顔なのでしょう。なんて優しい空気なのでしょう。

認め合う会話、許し合う関係、楽しげに語る皆さんの顔には、“介護予防”の言葉を超越した誇りと自信を感じます。

人生を織物（反物）に例えることを聞きました。一糸一糸が喜び、悲しみ、楽しさ、辛さ、哀しさ、苦しみであり、その感情の元となる出来事や経験で織りなされた反物が人生なのだと。

その反物には、きれいなものもあれば、苦労だらけの人生でボロボロになった織物もある、穴があいている反物もありでしょう。

どんな反物であったとして、すべてが価値ある反物であることを改めて感じました。個人的にはボロボロの反物のほうにひかれてしまうくらいです。

そんな感動と喜びを感じながら、時間を共にさせていただきました。

振り返りますと、6年前に子どもたちと始めたエコクラブ活動、「地域のいいところ探し」と同時に、徹底して、人生の先輩である古老たちの知恵の聞き取りにこだわってきました。子どもたちは、すべてが新鮮で、贅沢な自分たちの暮らしを振り返る子もいました。

「家族愛」「地域との助け合い」「自然への感謝や共生」「信仰」「平和への願い」等たくさんのごとを教えていただきました。

「人が生きて暮らす」ために必要な家族や地域とのかけがえのない絆について、ユーモアとファンタジーを持って語れる古老たちとの時間は、これからも大切にしていきたいものです。

ご覧の通り、この冊子は、真実を問う民俗学的な専門書や文献ではありません。

語り手である古老たちが山内で生きてきた証と誇りを楽しく語り、そこから見えてきた後世への“価値ある明るい遺言書”と考えていただけないでしょうか。

この報告書は、終わりではなくこれが始まりです。

山内エコクラブは、第二章のふるさと絵図作りがスタートしました。

地域に出向き、多くの人から「むかしの暮らしに潜む大切な叡知」を聞かせていただき、人が生き抜くことへの尊厳と古き良きものを大切にした“新しいふるさと山内づくり”を探求していきます。よろしくお願い申し上げます。

今回の発刊にあたっては、語り手の古老の方々はもちろんのこと、聞き手、関係者の皆様に、大変お世話になりました。厚くお礼を申し上げます。

「もっと（山内のこと）言わせて」等ご意見などがございましたら、今後の「山内ふるさと絵図作り」に反映させていただきますので、山内エコクラブまでご連絡ください。

なお、この取り組みは「平成25年度 滋賀県介護予防推進交付金」の助成を受けたことがきっかけとなり実現できたものです。

御拝読ありがとうございました。



平成 26 年 2 月 山内小学校 3 年生の子どもたちへの講師役のみなさ

山内回想遺産 2015年10月15日 発行

語り手 山内回想遺産グループ

企 画 山内エコクラブ

監 修 竜王真紀、井阪尚司

アドバイザー 金井萬造（立命館大学）

発行者 山内エコクラブ

〒528-0208 滋賀県甲賀市土山町黒川 2063